
ソルジャーミーツドラゴン

チハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソルジャーミーツドラゴン

【Nコード】

N8147N

【作者名】

チハ

【あらすじ】

南の孤島、硫黄島で青年と竜は出会う。

突然の出会いには青年と竜と世界の運命をホンの少し動かしたり動かさなかったり。

序盤は現実世界の現代日本が舞台。

徐々にファンタジー路線にシフト行く予定。

専門用語（自衛隊用語）が少し多めなので注意。困ったら検索推奨。あと、ウンチクは半分くらい嘘なので信じちゃ駄目だぞ。おいちゃんと約束だ。

それと、当然ながら現実と全く関わりないので、地名とか部隊とか名称とか性能緒言とか地形地物は現実と異なります、多分。

プロローグ 竜は舞い降りた

プロローグ 竜は舞い降りた

釣りを開始してから既に数時間。そろそろ切り上げ時だろう。

クーラーボックスの中には、やや小ぶりながらも酒の肴に良さそうなクラスが何匹かいる。

刺身に、なめろろくに、焼き魚・・・今日は中々豪勢な宴が出来そう
だ。

正直、一人で食べきれぬ量ではない。同僚を呼んでも良いだろう。

まあ、呼ばなくとも来そうな気がするが。

片づけをしようと海に背を向けた瞬間・・・風が舞った。

へりのダウンウオッシュのような風は砂浜の黒い砂を舞い上げ、全身に容赦なく叩きつける。

痛みを覚えるほどではないが、目を開けられない程度の風は数秒続いた。

そして、目を開けた先には・・・小山のような「何か」がいた。

竜との遭遇

目の前にいる「何か」を観察する。

小山のような体・長大な尾・頑丈そうな四本の足・鋭く尖った爪・全身を覆う鱗・白とも銀色とも言えるような表皮・恐ろしく面積の広い羽・人間くらいなら軽く飲み込めそうな口……色々と特徴を挙げれば切りがない。

一言で言う。目の前にいるのは竜だ。

それも、西洋の神話とかに出てくるタイプだ。

当然のことながら、現代にこんながいるはずがないのだが、目の前に確かにいる。

おまけに、こちらのことを観察しているのか、微動だにせず見つめてくる。……少し照れる。

さて、少しは余裕がありそうなので、西洋タイプの竜について思い出してみよう。

まあ、大体が邪悪な存在だ。人を食べたり、炎吐いたり、毒吐いたりと色々とろくでもないことしかない。おかげで、勇者に倒されるのが物語の中では定番。竜の血を浴びれば不死身になったりすることもある。

で、ここで重要なことは、人を食べたり、炎吐いたりの件だ。

今の僕は美味しくいただけたり、こんがり焼かれる可能性が高い。恐らく、こちらを観察しているのも餌の状態を確認しているのだろう。踊り食いか、火を通すのかを考えているのかもしれない。

まあ、そんなことを現実逃避気味に考えていると、タイミング良く竜のお腹の辺りから「グー」とも「ガー」とも聞こえる音が聞こえた。

断言しよう。この竜はお腹をすかせている。

逃げようと思い、左足をそろそろと動かしたら何か硬いものに当たる。……クーラーボックスだ。

竜を刺激しないようにゆつくりとした動作で、視線をそらさずにクーラーボックスの中から魚を一匹掴み取る。そのままゆつくりと下手投げの姿勢へ移行。

竜が人食主義ではなく雑食主義であればいいのだが、そう思いつつ竜の顔付近に魚を投げた。

投げた魚はクルクル回転しながら、綺麗な放物線を描きつつ竜の顔付近に向かっていき……。竜の額にぶち当たった。

……。色々な意味で時間が止まる。

竜が、ふざけた事していると美味しくいただきますよと言わんばかりに「ガルル」とも「グルグル」とも聞こえる威嚇の声を出す。うん、怖くて漏らしそう。

最初にこれは食べれるものだと示してから投げればよかった。

クーラーボックスの中からもう一匹魚を取り出して、これは食べ物ですというジェスチャーをする。

竜はコイツ馬鹿か、とでも言いたげな感じでこちらを見ている気がする。トカゲモドキの癖に生意気な。

まあ、流石に何度もジェスチャーをすると意図がわかったのか、首を振り振り早く投げると催促してくる。何気に会話なしで、ここまですり合っただけのは異常だと思う。

そんなことを思いながら魚を投擲。今度は竜もお口でキャッチ&イト。

意外に気に入ったのか、今度の催促は猛烈アピール。ヘッドバンキングの域まできてる。地面が少し揺れてうざい。

まあ、それからしばらくデジカメで動画を撮影しながらアシカシヨ一気分で竜に魚を投げ続けること数分。もうクーラーボックスの中は空だ。それを見せたときの竜の落胆っぷりといったら中々笑えた。普通、それくらいでフラリと倒れるもんかね？

まあ、フェイントで魚を投げる振りをして投げなかったら、マジ切れされて吼えられたから気に入ったのは間違いない。

で、竜は自力で魚を捕るためか、海に向かってノシノシ歩き出した。

この島は潮の流れがきついのと、サメが出るので遊泳禁止なのだけど、竜にとっては些細な問題だろう。まあ、そもそも竜が泳げるかどうかは知らないが。

手を振りながら別れをアピールしてる俺の横で、唐突に竜が止まった。

何か思い出したらしい。しばらくこちらをチラチラ見ながら考え事をしてる。

いや、良いから止まらなくて良いから、そのままもう二度と会わなくて良いから、そう思いつつ満面の引きつった笑顔を浮かべつつ、全身から嫌な汗を垂れ流す。

魚を捕る前に栄養補給ということで獲物としての僕を見ているかと思ったら違った。

竜は自分の身体に爪を立てたかと思うと、直径30センチ位の鱗を一枚剥ぎ取り放り投げてきた。魚のお礼らしい。意外と義理堅いやつだ。

で、そのまま僕を振り返ることも無く、水を掻き分けて進む様は怪獣映画そのまんま。あの竜が最後の一匹だとは思えない等、有名怪獣映画のセリフを口ずさみつつ、デジカメをムービーモードからフォトモードに切り替えてフォトを何枚も撮る。パソコンの壁紙はこれで決まりだ。

そのまま写真を撮りつつ竜が水面下に消えるのを見届けてから。即帰り支度をする。もちろん、竜の鱗と竜の額にぶち当たってそのまま放置された砂まみれの魚も忘れない。

まあ、今日は宴会は不可能だろう。こんな魚一匹では酒の肴には少なすぎるし、何より・・・当直に報告と非常呼集が待っている。

青い海と豊かな緑に囲まれた常夏の楽園に見えるこの島は最果ての自衛隊基地、硫黄島。

そんな場所に超大型の肉食動物がやってきた。今日のこの出来事は、この出来事は相当な騒動になるだろう。

この閉鎖された島から逃げ出す手段は・・・ほぼ無い。

竜との遭遇 2

釣りの往復の足に使っていたバギー（厚生物品として硫黄島の隊員は申請して運が良ければ借りれる。数が足りないから抽選とコネで決まる）を返納して、その足で当直室に向かう。

今日の当直は田中2尉。飲み友達だし、それなりに融通が利く人なので大丈夫だろう。そこらのバ幹部よりは何ぼかマシだ。

「入ります」

「どうぞ〜」

暇なのであるう。島で唯一見れる衛星放送をテレビで見てる。ニュースのようだ。

「で？面倒ごとは勘弁だよ？」

「すみません。面倒ごとです」

そう言っつて、デジカメを差し出す。

竜に魚を投げ渡している動画が移っている。

「何これ？3Dにしては良く出来すぎてるけど。おまけにこれ・・・

・沈船付近だよね？」

田中2尉の言っている「沈船」というのは釣りをしていた場所の地名だ。動画の中に座礁した船があるから気がついたようだ。

「はい。釣りしてて会いました」

「で、これって竜だよね？」

「多分・・・。ついでに・・・こんなのもあります」

そう言っつて、鱗を手渡す。

「うわー、こいつもまた良く出来てるな〜」

コンコン叩いたり、シゲシゲと眺めたりするが何ともまあ疑わしげうん、全然信じてない。日頃の行い悪いから狼少年ですか。

「ついでに、デジカメの写真もお勧めです」

「これ、データを後でくれる？私物のノートンの壁紙に使うからさ」

脳内で、あれが最後の・・・とか呟いてるに違いない。あの怪獣映

画は先週一緒に呑みながら見てたし。

「どうぞどうぞ」

「感謝、今度ビールおごるよ」

そう言うなり立ち上がり、制服のしわを伸ばしたり、スリッパから短靴（革靴）に履き替え、シヨップ帽（識別帽。それぞれの職場を識別するためのキャップ）を被りはじめた。

なんだかんだ言っ、信じてないようでちゃんと信じてくれてるらしい。

「じゃ、確認しに行こうか。竜とやらがいた場所へ」

そう言いつつ、業務車（市販の自動車の自衛隊バージョン）の鍵を鍵収納ボックスから取り出しつつ僕に一言放つ。

「足跡ぐらいは偽装してるんだよね？」

前言撤回。やっぱり信じてない。

竜との遭遇3

釣りをしてて竜に出会った場所、「沈船」に再び戻ってきた。

目の前には黒い砂浜と地名の由来になった沈船群。米軍が港を作ろうとして、防波堤代わりに自沈させた船の成れの果てだ。まあ、島が隆起したせいで港造りは頓挫。今では、良い釣り場になっている。ここを離れて既に一時間近く経っている。周囲に竜の姿は無い。

業務車に同乗していた田中2尉は、竜の足跡を観察したり、色々と目測で測ったり、デジカメで撮影してたりする。

で、自分とは言えば、それを遠巻きで見ながら業務車内で喫煙中である。

サボっているわけではない。

現場を荒らすな、一步も歩くなと言われた時の僕の心境は……皆様のご想像にお任せする。

と、ようやく満足したのであろう。田中2尉も業務車に戻ってきた。あ、靴脱いで中に入った砂落としてる。まあ、短靴で砂浜歩くと、ああなるよね。

「いや、本当にあるとわね。あ、もちろん君の言ってることは信じてたよ?」

嘘だっ!

「で、何か発見ありましたか?」

「うん、個人での偽造が不可能だつてことかな。足跡のへこみ具合や、体重の移動の痕跡とかから考えると無理だね。おかげで、君の悪戯だと日誌に書けなくなっちゃったな」

「いや、それ以外にも見つけたことあるんでしょ? 体重とか、体長とか、習性とか、怪我の有無とか」

そう言つと、良くぞ聞いてくれましたと言わんばかりに、田中2尉の目が輝く。あー、地雷踏んだかもしれん。絶対話が長くなる。

「良くぞ聞いてくれました!」

「ストップ！とりあえず、移動しませんか」

「え、ああ、そうだね。とりあえず、当直室帰る前に寄り道しますか」

「寄り道？良いですけど・・・何処へですか？」

「竜に聞いてよ」

そう言つて、砂浜を指差す田中2尉。その指先の指し示すのは・・・
・・・上陸中の竜一匹とサメ一匹。

竜がサメをくわえてる様は、ユーモラスさよりもシユールさが際立つが、実家にある木彫りの熊の置物を髣髴させる。

「行き先が竜の胃袋の中だったら笑えないよね」

・・・嬉しそうに呟くんじゃねえ、バ幹部。

「まあ、既に獲物を手に入れてるから、こちらは安全じゃないんですか？」

「いや、メインディッシュの魚の前に、前菜代わりの人間というのも良いかもね」

良くねえよ！あと、何であんた嬉しそうなんだ！

「いや、そんなスナック感覚で食べられたくないんですが・・・。

それと、どうします？こっちにズンズン向かってくるんですが」

獲物が嬉しいのか、尻尾を振り振り向かってくる竜までの距離は残り500mを切った。

「じゃあ、誘導しようか」

「・・・ハイ？」

「動き回られても困るし、監視しやすい場所が良いよね」

主婦が献立を考える位のノリで言ってるよ・・・。

「正気ですか？」

「いやいや、正気も正気。ここ周辺は燃料タンクにパイプラインとか壊されたら困るもの多いしね」

正論ではあるが、ここで重大な問題が一つ。

「でも、どうやって誘導します？」

「え？いつもやってるじゃん」

「は？」

「定期便のマーシャリング」

そう言つて、業務車に備え付けられてる発炎筒を、こちらに投げたよこした。

えーと、これはあれですか……。

航空機と同じように竜を誘導しろと……。

いや、無理だろ、常識的に考えて。

「男は度胸！なんでもためしてみるのさ」

そう、人事のようにニヤニヤ嫌な笑みを浮かべながら話す田中2尉に対する思いはただ一言。

「畜生、いつか殺してやる」

そう呟きつつ、業務車から降りる。

発炎筒のキャップをはずし、マッチを擦る要領で点火。半ばやけくそで振り回す。上手く誘導できなくても僕の所為じゃないからなと思いつつ……。

竜との遭遇 4

ちよつと混乱中である。余りにも異常な光景を見ると思考がフリーズするというのは本当らしい。

で、それはどのような光景かというと・・・『ドラゴン3分間クッキング』だ。

目の前に迫った竜は唐突に反転・・・もう一回海に潜りにいくかと思いきや・・・波打ち際でくわえていた鯨をさばき始めた。

まず、鯨の頭を食いちぎって、そのまま頭は海にリリース。続いて、腹を爪で切り裂いてハラワタをこそぎ取った後、海水で水洗い。最後に砂浜に置いた鯨に口から炎を吹いて表面を焼いたかと思うと、もう一度海水でさつと洗って出来上がりという按配だ。

ついでながら、砂浜の一部が鯨の血で赤く染まってて色々不気味なので、一雨スコールが欲しいところだ。

「いやー、非常識だね〜」

と、人に竜を誘導するよう命じた非常識な幹部、田中2尉が何か言ってる。いつの間にか業務車から降りてきたらしい。

「どこから突っ込みいれればいいのか困る光景ですよ、あれ。炎とか吐いてますし」

前足を使って器用に背中側から鯨を食べている竜から目を離さずに呟く。海の生態系の頂点である鯨が、まるで小魚のようだ。

「むしろ、内臓を捨ててることに驚くよ。グルメなのかね〜」

「いや、それ大した事じゃないのでは・・・」

「そうかな？熊と違って、川上ってきた鮭の卵とか内蔵しか食わなかったりする場合もあるし。大体、肉食動物って獲物の内臓から必須栄養素得てるしね〜」

「つまり？」

「グルメなんですよ」

「・・・見たまんまじゃねーか！

「まあ、冗談は置いておいて、魚をさばく本能だか知能は純粹に凄いな。知能だとしたら、厄介だね」

どのような意味での厄介なのかはあえて聞かない。

「さて、さっきは伝え忘れてたけど、竜の誘導先は『戦車豪』でよろしく。竜も気に入ればいいんだけどね」

『戦車豪』というのは、わりと最近に遺骨収集のための通路を作るために森を切り開いてたから見つかった場所だ。文字通り戦車用の豪。山肌をえぐって広間を作った後、戦車が2両入る横穴が3本掘られた場所だ。

戦車も入るほどだ。羽を畳んで、身を縮ませれば竜の寢床になるかもしれない。

つまり、竜が居つくのなら巣を提供しようというわけだろう。

硫黄島にはこのような場所が各地に点在するが、戦車が入るほどのクラスはさほど存在しない。

「・・・なんでそこなんです？もつと都合がいい場所があると思うんですが。南側の海岸ならば、自然に出来た横穴が何個もありますよ？」

『戦車豪』では、余りに居住区に近すぎるのだ。直線距離にして多分、2kmほどしかない。万が一を考えるならもう少し離れたほうがいい。

その点、海岸付近ならある程度の距離が保てる。

「『戦車豪』なら海から若干距離があるからね。それにジャングルで囲まれているから身動きが取れるほど広い場所が無いしね」

竜から目を話さずに笑顔で答える田中2尉。・・・その口調とは裏腹に言っている意味は剣呑だ。

つまり、何かあった場合・・・逃がすことは無い、そう言いつつもりなのだろう。

汗ばむような陽気だが、少し寒気を感じた。

竜との遭遇 5

竜を誘導する際、初歩的かつ重大な問題点が見つかった。歩行速度の違いだ。

後ろ向きで歩きながら、頭の横で手を前後に振る・・・車を誘導するように行ったら、竜は驚くべき素直さでついて来た。（因みにだが、発炎筒は竜が食事とうがいをしている間に消えている）問題点はすぐに明らかになった。

こちらが10歩歩いていてのを、竜は1歩（四足歩行なのでこの言い方もおかしいが）で済ませてしまうのだ。

短距離だったら問題ない。だが、目的地『戦車豪』への道のりはかなりある。後ろ向きで歩く僕の歩みは遅々として進まない。行き先もわからず、連れて行かれる竜の心境はどのようなものだったかはわからない。

業を煮やしたのだろうか、急に竜は動きを止め、その場に座り込んだ。

困惑する僕を尻目に、右前足を突き出す。

竜が右前足先とこちらに交互に顎を向けるのを、何度も繰り返すうちによく理解が出来た。乗れということらしい。

おっかなびっくり近づく僕に対して竜は落ち着いている。目と呼吸を除き、ピクリとも動かない。

それはまるで、こちらの勇気を試しているようにも見えた。あるいは、無謀さかもしれない。

間近でみる竜は美しかった。

ガリバー旅行記のスイフトは、巨大な人間は醜いと書いた。造形的に美しくない。

それに対し、竜は美しかった。

それは、機能美、空力的な美しさかもしれない。スマートだった。

つまるところ、それは・・・速い物は美しいの一言に尽きる。

直接見てはいないものの、長大な羽と合わせて如何にも大空を自由に舞う姿が思い浮かぶ。・・・・・・もつとも、このサイズ・重量の生物が空を飛ぶことは物理的にありえないと知りつつ。

と、竜が急かすような声をあげた。少し見惚れていたらしい。

「はいはい、すみません」と

右前足にそつと乗っかる。靴を脱いだほうがいいだろうかと微妙に思いつつ。

と、足に乗ったのを確認したのだろう。竜は右前足を頭の真横までゆっくりと上昇させた。

慎重に、足から頭に移る。精々2階位の高さとはいえ、何処に掴まればいいかわからない、不安定な足場では自然と慎重になる。

竜の頭頂部ともいべき場所に落ち着き先を見つけた。跨って鱗を掴む。

掴んだ鱗は仄かな温かみがあった。外見とは裏腹に、恒温動物なのだろうか。

周囲を見渡す。人の身では有り得ない高さ、竜の視点だ。

普段はジャングルに覆われていて目に付かない様々な造形物が目に付く。

右手に見える普段は目にする事が出来ない、この角度からのすり鉢山は新鮮だった。火口の位置の挟れている部分は興味深かった。余り周囲を見渡していてもいけない。

目の前の業務車からも田中2尉が呆れ顔で顔を突き出している。

「パアンツアーフォー！」

色々な意味で間違っているが、最適な掛け声をかけて竜に合図を送る。

間違いない、僕は幸せだった。

竜との遭遇 6

当初は楽しんでた。竜に乗る機会など想像すら出来ない位貴重な体験だからだ。

最近では、アフガンで馬に乗って行動した米軍の特殊部隊がいたが、竜に乗った自衛官つてのはそれよりも稀だろう。

唯一の難点は、揺れだ。一步步ごとに結構揺れる。おまけに、周囲の光景に興味をそえられるのか頭がブンブン動く。乗ってる人間からすれば結構しんどい。乗り物酔いはしない性質だが、始終揺れたり、視界が動くのはやはり落ち着かない。

まあ、それは実は大した事じゃない。

困った事になった。

竜の頭に乗ってみたものの、誘導が出来ない事に気づいてしまった。当初は左右の手を振り、その方向の道に行けと示そうと思っていたのだが、無理だった。

いや、竜が従わないというわけではない。

僕が竜の視界にいないということだ。

竜の目の配置はほぼ前側に2つ・・・距離を測るのにも左右の視界を得るにもちょうど良くらしいの位置だ。つまり、普通の生物とほぼ変わらない。

そして、普通の生物は通常・・・自分の頭頂部の位置を見ることはできない。

だから、僕が手を振ろうが竜が気がつかないので意味が無いということだ。

幸いなことに道はしばらく真っ直ぐ進んでいけば良い。

放っておいても竜はわき道には入らずに、道を真っ直ぐ進んでくれている。竜が道という概念を理解してるのには少し驚いたが、そのほうが楽なので良い。

因みになのだが、竜が理解しているとかは、勝手に僕が勘違いして

いるだけかもしれない。でもまあ、ジャングルだろうが何だろうが無視して直進しないでくれるのはありがたい。

と、唐突にだが気がついた。

竜に対して誘導が必要ないかもしれない可能性を思いついた。

いや、竜が僕の心を読んでいるとかじゃない。もっと簡単な理由だ。田中2尉が業務車で先導してるのだ。竜はそれについていつているに過ぎないに違いない。

何というか、深く考えていたのが馬鹿みたいだ。どっと脱力する。さて、そろそろ右折……。

思ったとおり、業務車の後を追ってこちらは何もしていないのに勝手に右に曲がってくれる。

むう、楽チンだ。ぶっちゃけ、自分はいらん子かもしれん。

それから何事も無く、勝手に右左折してくれたので竜は目的地の「戦車豪」に到着した。「戦車豪」の形は漢字の「山」に似ている。下が南で上が北だ。

右下の突き出ている部分が入り口で、入り口以外の下の部分は10m程の壁になっているそこを入ったら少し広めの広間になっている。その広間からは横穴が三つあるという感じだ。

目の前にはハザードを焚いて停車する業務車。右手には崖を切り開いたようになってる戦車豪の入り口がある。

竜の頭をポンポン叩いて下ろしてもらおう。……そろそろ異常に正確に意思疎通が出来るのも慣れてきた。何というか、考えるだけ無駄だ。

さて、下ろしてもらったら早速竜を「戦車豪」の中に導く。入り口から入ると少し小さな広間になっており、そこから3本の横穴へ行けるようになってる。そのうちの一つを覗いてみたが……。

……いつの間にか倉庫になっていた。古くなって使われなくなった官品（カンピン。官給品の意）のロッカーやら、ベッド等が所狭しと置かれている。本来は返納しないといけないのだが、離島

という場所柄それもままならないので、いつの間にかここは一時保管所になっているようだ。二つ目も同様。

幸い一番奥の三つ目は何とも無かった。入ってみるとひんやりとして実に気持ち良い。一番奥まで行くと硫黄島の強烈な日光に慣れた目ではほとんど真つ暗に感じるほどの暗さ。かろうじて、二つ目や一つ目の横穴につながっている通路が右手にあるのを確認する。崩落の恐れもなさそうだ。

まあ、あまり涼んで待たせてもしょうがないので、広場の竜の目の前に行く。

竜は何かテンション上がっていた。

横穴にチラチラ視線を送ったり、尻尾をビタンビタン地面に打ち付けている。

そんな竜に三つ目の横穴に誘導し中に入るよう指示する。

最初は外から横穴の中を覗くだけだったが、納得できたのか頭からソロソロと入っていく。

相変わらず、ビタンビタン地面を打ちつけている尻尾を除き、竜の全身が入るのを確認する。

と、段々と竜の尻尾の動きが少なくなったと思ったら、本当に動きを止めた。

もしやと思い、二つ目の横穴から通路越しに三つ目の横穴を覗くと、竜の顔がま直に見える。竜は目を閉じていた。寝ているのだろう。

見ず知らずの他種族の前でよくもまあ寝れる気になる肝の太さに呆れつつ、微笑を浮かべる。

懸念していた、竜がこの場所を気に入らないかもしれないという事がなくなったからだ。

正直、事がうまく行き過ぎて怖いくらいだった……。

竜との遭遇 7

横穴から出るといつの間にかやら、田中2尉がいた。

真剣な表情で携帯をいじっている。

普通ならば、メールでもしてると思うだろう。

だが、この島では携帯は使えない。アンテナがそもそも無いのだ。

外部との連絡手段は自衛隊専用の回線か両手の指に満たない数の公衆電話。因みに、公衆電話は海外通話と同じくらいの速度でテレカを消費する。長電話は死を意味するといっても過言ではない。

では、そんな中携帯をいじる意味はといえば、携帯に付加されている機能だろう。

カメラにワンセグ、ラジオは携帯から音が出ていないので却下。そもそも、ワンセグもラジオも東京タワーから千キロ以上離れている東京（住所的に硫黄島は東京なのだ）には電波は届きはしない。

さて、それ以外で使う機能といえば時計とアラーム、カレンダーと・・・GPSだ。

GPS・・・グローバル・ポジショニング・システム（GPS：Global Positioning System、全世界測位システム）とは、地球上の現在位置を測定するための衛星測位システムの一つであり米国によって運用されるシステムだ。

簡単に言うと、自分の位置を教えてくれる物だ。

実際、僕も良く使っている。自生している唐辛子採集ポイントの登録やジャングルの散策、GPSログを使ったジョギングの距離計測等、ありとあらゆる事に使っている。

文明の利器って素敵、愛してる。GPS衛星打ち上げてくれた米国マジ感謝、抱かれてもいい。

と、田中2尉も携帯をポケットにしまいこむ。終わったようだ。

「終わりました？GPS？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あれ、いつも笑顔を絶やさない田中2尉の顔が何かこう・・・怖
いんだけどナニコレ？

えーと、何か地雷踏んだのでしょうか。

「・・・・・・・・・・」

沈黙が重い・・・。

「・・・・・・・・・・とりあえず、帰りませんか？」

「・・・・・・・・・・」

意味はわからないけど、そそくさと業務車に逃げるように早足で向
かう。

ああ、背中に何か視線を感じる。

原因について考えると・・・・・・・・GPSだ。ドンピシャで当てて
しまったらしい。

でもまあ、たかがそれがどういう意味を持つのだろうと首をひねろ
うとした瞬間・・・・・・・・全て悟ってしまった。

J D A Mだ。

俗に言うGPS誘導爆弾。

衛星からの電波に導かれて、天候にも左右されず半径10m以内に
命中する恐るべき兵器。

元々は米軍が使っていた。イラクやアフガニスタンで数多くの戦果
を挙げた。そして、それは今は・・・・航空自衛隊も試験を終え、
運用している。

それを実際に使うのならば必要なのはGPS座標。誤爆を防ぐため
ならば重要だ。それが、携帯レベルの精度でも無いよりましだ。

勘違いであればいい。こんなのは冗談だったほうが良い。

だが、それは多分・・・・・・・・期待を裏切られる。そんな気がし
た。

今までずっと無言だった田中2尉はポツリと呟く。

「君の思っていたとおりだよ。座標や方位を測っていた。後で詳し
く話す」

気おされたように無言でうなづく。

無言で二人とも業務車に乗り込む。

田中2尉はハンドルに額を押し当てたまま考え込んでいる。普段のヘラヘラ笑いながら即断即決している姿からすれば、違和感がありすぎる。

その姿を見て、地雷を踏む覚悟を決める。

「JDAMですか？」

「……勘が良いのも考えものだよ。言葉はもう少し選んだほうが良い」

こちらを向き、表情を消したまま呟く。溜息をした。

「独り言聞いてもらってもいいですか。長くなりますが」

「……どうぞ」

そこからは、まさに僕の独演会だ。聴衆は田中2尉。

「まず、三沢（三沢基地。青森県）の3空（第3航空団）からF-2（支援戦闘機、俗に言う戦闘攻撃機）を百里（百里基地。茨城県）に。燃料補給後は硫黄島へ。硫黄島到着後に燃料補給、そして空輸していたJDAMをF-2に装着。F-2はそのまま離陸。硫黄島南側海上で待機後、連絡あり次第にトス・アンド・ロフト（上昇中での投げ上げ投下。人間が下手投げで投げるような感じで遠くまで到達する）により、目標の数km先からの投下。目標の竜にはF-2の音が聞こえないように配慮、聞こえるのはJDAMの滑空し空気を切り裂いている音のみ。JDAMの目標は『戦車豪』の横穴。竜がスヤスヤ寝込んでいる至近にJDAMは着弾する。高性能炸薬の爆発は主に上に効果を及ぼしつつも、横穴にも効果を発揮する。音速などとは比較にならないほどの高速な圧力は竜に向け効果を及ぼし、痛みを覚悟する以前に安らかな死を提供……こんなところですか？」

「……出来ればそんなことはしたくないけどね」

田中2尉は僕の独り言を否定しなかった。否定してほしかった。

竜との遭遇 8

田中2尉は一秒でも惜しいといった感じで、業務車を走らせる。

硫黄島は主要な道路を除けば、砂利道なら良い方で、森を切り開いただけという場所も数多い。で、『戦車豪』付近は森を切り開いただけという表現がもっともふさわしい。道路を平坦にするために、土を海岸まで押し出したブルドーザーの無限軌道（キヤタピラの意。キヤタピラは商標なので余り使いたくない）跡がくつきりと残っているくらいだ。それに、道路にはついさつき竜の足跡が付け加えられている。

つまり、そんな場所で速度を出すと・・・乗ってる人間は死ぬ。

「ひぎい！」

一瞬の浮遊感の後に突き上げるような衝撃に悲鳴をあげる。せめて、自分が運転していれば耐えようがあるのだが、他人の運転はどうにも落ち着かない。

なにより、最低地上高がそれほど高くない業務車でこんな走り方をすると、エンジンのオイルパンにいつ穴が開くかわからない恐怖感がある。硫黄島は人手が少ないので修理を手伝わされるのだ。

抗議の声をあげようにも舌をかみそうて出来そうもない。

まあ、それも所詮狭い島内・・・しばらく我慢すればすぐにまともな道にでる。ようやく喋れる。

「こんな速度出す必要あるんですか！」

「足りない、全然足りないよ。君は事の重大さをわかってない」

「でも、あんな大人し目な竜はそれほど危険に思えませんが。確かに用心は必要ですが」

「はあ、君は勘違いしてるみたいだね。直接的な脅威ではなく、間接的な脅威が問題なんだよ」

そう言いつつため息を一つつく田中2尉。

「以前、僕が7空（第7航空団。茨城県百里基地所在の戦闘航空団）

にいた時に、アラスカに行ったことがある。コープサンダー……今はレッドフラッグだったっけ？まあそんな名前の演習だよ。そこで色々貴重な体験をさせてもらったんだけど、そこで学んだことが一つある。……バードストライクの対処だよ」

バードストライク……航空機に関わる人間には馴染み深く、憎らしい言葉。

簡単に言うなら、航空機に対する鳥の神風アタック。飛行場という場所は、安全のため周囲に広大な敷地がある。場所によつては海に近い場所も多い。そうなるかどうか。飛行場自体に独自の生態系が出来上がるのだ。その生態系の中の頂点に鳥が来ることが多い。天敵を人間が駆除するからだ。そんな場所で航空機が離発着や低空で飛行したらどうなるか……。飛行機と鳥との不幸な出会いが生まれるというわけだ。鳥は己の命との対価に航空機に羽毛と赤い染みと凹みを残すか、航空機を落とす。あと、その染みを落とす整備員は泣く。

当然、航空機自体は元より、エンジンに吸い込まれた場合も考えて設計されている。F-4ファントム（F-4EJ。支援戦闘機）のエンジンJ-79は鳥3匹吸い込んでも大丈夫だと聞いたこともある。それでも、事故事例からバードストライクの文字は消えない。さて、ここで笑い話。

ロールスロイスの技術者は、旅客機や戦闘機の風防に向かって、死んだ鶏を高速で発射する特殊装置を製作した。

しばしば発生する鳥の衝突事故を模して、風防の強度試験をするためだった。

この発射装置のことを耳にしたアメリカの技術者たちは、是非それを使って最近開発した高速列車のフロントガラスを試験してみたいと考えた。

話し合いがまとまり、装置がアメリカへ送られてきた。

発射筒から鶏が撃ちだされ、破片飛散防止のフロントガラスを粉々

に打ち破り、制御盤を突き抜け、技術者がすわる椅子の背もたれを二つにぶち割り、後部の仕切り壁に突き刺さった光景に技術者たちは慄然とした。

驚いたアメリカの技術者たちは、悲惨な実験結果を示す写真にフロントガラスの設計図を添えてロールスロイスへ送り、イギリスの科学者たちに詳しい意見を求めた。それに対するロールスロイスからの返事はたった一行だった。

「チキンを解凍してください。」

思わず米笑い（造語。アメリカンジョークを聞いたアメリカ人的な笑い方を指す）請け合いだが、実は余り笑えない。

バードストライクはそれくらい恐ろしいのだ。高速で飛ぶ航空機は雲を突き抜けるだけでダメージを受ける。速度とはそれくらいに恐ろしい。

だが、それが今回の竜とどんな関係がある？わからない。

「米軍はね……バードストライクした場合、防護服（BC・生物学対処用の服。ガスマスクと全身を覆うゴムの服からなる）を着た人間がバードストライク後の痕跡から血や肉片を回収……それを調べた後じゃないと、誰も航空機に近づくことは出来ない。その意味は君にもわかるよね。」

思わず唾を飲み込む。一瞬で理解できた……。

「病原体の有無ですか……。」

「正解。」

つまり、そんなどんな病原体を持っているかわからない竜に不用意に近づいた僕は感染した可能性がある。竜にとっては無害な菌も人間にとっては有害な可能性がある。それなのに、僕は竜の背に乗るような暴挙をした。それに、田中2尉も鱗を触っている。

そして、僕らは島内の各地を歩き回った。今は寝ているが、竜の動きも予測はつかない。

……こうなれば、『封じ込め』しかない。島を封鎖するのだ。

感染した恐れがある人間は島内から出ることが出来ない。当然、主の感染源の竜はどんな手を尽くしても殺す。多分、田中2尉の立てていた竜を殺す計画もその一環だろう。もつともそれが終わっても、終わりではない。食料は空挺投下か自分で釣るかしかない。燃料は補給できない。水は雨水を浄水しているが、燃料が切れればそれも出来ない。そして、島にある設備は人間が人間らしく生きていく機能を一つ一つ無くしていく。最期は訪れる。何年後かはわからないが、何時かは来る。島が無くなる時が。まあ、そうなる前に僕は生きていないだろう。

僕は厄災の原因になるだろうから。

竜と思惑 1

「馬鹿か、君は」

なんか、思いつきり叱られてます、はい。

目の前には心底呆れ果てたという感じの眼鏡かけたちょっときつめな印象な女医さん。

で、かなりな美人さんなもんで、実にこう・・・何といいますか・・・くるものがあります。ちょっとゾクゾクします。目覚めそう。言葉攻めつて良いよね、しみじみと思う今日この頃です。また変態という名の紳士レベルが上がりそうです。

事の発端は数分前、衛生隊（自衛隊の基地内にある病院。医師も看護師も全員自衛官）に着いた直後だ。

田中2尉は衛生隊の前で僕を業務車から降ろして、そのまま直室に帰っていった。

で、念のために少し話を聞こうと思った矢先がこれである。

以下ダイジェストで送ります。

「ちわーす、三河屋でーす」

「味噌と醤油は間に合ってる。日本酒はありつたけ置いていけ。無いなら安楽死だ」

「じゃあ、今度古酒持つてきますんで。生原酒の平成13年物。ただし缶ですけど」

「生原酒で平成13年物だと？有り得ん。・・・菊水か？あれなら常温保存可能だが」

「いえ、岐阜の地酒です。冷蔵保存しか不可。アルコール度数17%。濃厚な味わいです。蔵元からの直売店の在庫限りでレアですよ。メーカーのホームページにも銘柄が既にありません」

「リットル2万で足りるか？」

「1万あれば4リットル買えますよ。飛実団（飛行開発実験団。岐

岐阜、岐阜基地所在部隊)の同期が箱で送ってくれたんで送料だけ上乗せで良いです。あと、ビールじゃないんだからリトル使わないでください」

「在庫に余裕があるなら1升貰おう。」

「了解。味は保障します、お楽しみください」

「返礼というわけではないが、九州の焼酎で美味しいのがある。今度開けるが呑むか？」

「是非とも」

「うむ。で、本題は別にあるんだろう？こんなのは内線電話ですむ」

「あ、わかりますか。じゃあ、本題に入ります。結婚してください。それと、実は厄介な事がありました」

「結婚については、とりあえず死ね。厄介事については聞こう」

「……ドラゴンが出たんです」

「ドラゴン？何だそれは？」

「文字通りです」

「……(コモド)ドラゴンか！！何処の馬鹿が島に持ち込んだ！！」

「いつの間にか、でかいのが島にいますよ」

「何でアレ(コモドドラゴン)の成体がいるんだ！生態系だけではなく、人間にも危害が及ぶぞ！！」

「おまけにバイオハザードの危機あります」

「噛まれたのか！？確かにアレの口内には腐敗菌が増殖してるし、毒を持っている！患者は誰だ！すぐに連れて来い！」

「あ、患者候補は俺です。乗っかりました」

「はあ！？馬鹿か、君は」

「いや、ついノリと勢いでドラゴンライダーに……」

「馬鹿か、君は。いや、愚問だったな馬鹿なのは確定だったな。あと、死ね」

まあ、そんな感じで説教開始。

まあ、そんな感じで現在進行形で叱られています。

誰か助けて、じゃないと、本当に目覚めちゃう。

あ、因みに説教してくるのは石井3等空尉、飲み友達です。医官なのに「死ね」が口癖の素敵ガール。それと、口癖の「死ね」は照れ隠しだと最近知りました。はあ、嫁に來ないかな。

竜と思惑2

「おいそこ！ニヤニヤするな、何だその満ち足りた笑みは」

「百万ドルの笑みです。ご堪能いただけただけでしょうか？」

笑顔でサムズアップ、親指をぐつと立ててみる。

「貴様には反省しろといっているんだ！」

キレ気味の女医さんは、僕の親指を掴んで曲がらないほうに……つて、痛！地味に痛いですよ！。

「言葉攻めだけじゃなくて、そんなプレイまで！ひぎい！」

段々洒落にならなくなってまいりました。具体的には筋が！筋が！……！！！！

「ふむ、そろそろ折れるか、筋が切れるな。脱臼のほうが早いかな？癖がつくから厄介だろうな」

うわー、凄くいい笑顔です、興奮して上気して赤みが増した頬が実にエロい。怖いのにかわいい、混ぜて怖い（造語）！

思わずデジカメで撮ってみる。

「……………ここまで反省の色が見られないと対処に困るな」

「説教しても喜ぶだけですし、全くもって始末に終えないかと」

「お前が言っな」

「はい」

「あー、どこまで話していた。説教で少し忘れてしまった」

因みに、まだ親指掴まれたままです。

「えーと、ドラゴンに乗ったところまでですかね」

「ああ、そうだったな……。ところでなんでコモドドラゴンをドラゴンと略すんだ？」

「いや、コモドドラゴンじゃなくてドラゴン、竜だからですよ」

「え？」

「え？」

「竜？」

「竜」

「コモドドラゴンだろう？」

「神話とかに出てくるような怪獣みたいなやつです」

予想外の返答だったのか思わず表情を弛緩させる石井3尉。俗に言うポカーンとした顔。久々に見る表情なので実に新鮮。うん、かわいいい。

……でも、隙が出来たと思って親指から手を振り払おうとしたのに、がちりホールドしてる辺り素敵です。痛みで全身から嫌な汗が出てまいりました。

因みに、コモドドラゴンはインドネシア辺りにいるでっかいトカゲです。結構現地の人が襲われていて死んでいます。

「馬鹿だ馬鹿だと思っていたが……ここまでとは」

「予想通りの返答ありがとうございます」

色々としりが軽い所為で最近狼少年になり過ぎである。

まあ、わかっていたことなのでデジカメの画像を見せる。

「……私の顔じゃないか」

「いっけね」

てへ！失敗！

あ、痛い！親指が親指が！！！！

「こつち！こちらが本命です！」

デジカメのディスプレイには、今回はしっかりと海に入っていく竜の写真。

「何だこれは！！！！！！」

「いでー！！！！！！！！！！」

今ブチって！親指辺りでブチって音が！！！！！！

「ああ、すまん。興奮して力が入ってしまった」

「それなら手を離してください」

「それはまかりならん」

「ああ、いきなり結婚では早いから握手からって、いてててて」

「何を言っている？けだものには痛みでわからせるしかない。それ

を行っているだけだ」

「調教だなんてそ、痛！ギブ！まじギブ！」

「ギブ？何かくれるのか？」

「ギブアップ！ギブアップ！本当にすみませんでした！」

ようやく手を離してくれた。

「最初っから反省の色を見せておけば良かったものを」

「一言謝っただけで、許してくれる石井ちゃんマジ素直！マジかわいい！結婚して！」

「……………」

「無言でメス取り出すの怖いんで、本当に勘弁してください」

「まじめに話すと誓え。じゃないと麻酔無しで親指切り離す」

「ハイ」

何か疲れた様子の石井3尉。デジカメの写真にじっと目を凝らす。

「動画もありますよ」

「すまん、操作がわからん。見せてくれ」

「はい、少しお待ちあれ」

ここで空気読まずエロ動画とか見せたら刺されるだろうな！。

「変なもの見せたら切るからな」

「は、はい」

読まれてる！！

「ど、どうぞ」

「ふむん、拝見する」

そのままデジカメのディスプレイ食い入るよう見つめる石井3尉の横顔を見つめる。心なしか徐々に表情が険しくなっている気がする。

「……………本当に存在するんだな」

「います。本日常直幹部の田中2尉も実際に見て確認しました。今頃当直室で内線掛け捲りですよ」

「ふむ、まあそちらの対処は良いとして……………なぜ衛生隊に来た？怪我とか負ったわけじゃないんだろう？」

「ええ、ですが・・・竜が病気を媒介する可能性もあるので、それについて話を聞こうかと。実際に僕は触れてしまったので」

「ほう、良いところに気がついたな」

と、急に笑顔になる石井3尉。

「大丈夫だ、問題ない」

「・・・妙に自信がありますが、何か根拠でもあるんですか？」

「うん・・・ちよつとな、確信は持てないが。ところで、竜は今何処に？」

「『戦車豪』の横穴で寝ています。今さっき誘導してました」

「あそこか・・・。そうか、じゃあ急いで向かおう。好都合だな、寝てる間に調べたいことがある。行く途中の車内で、いきさつを聞かせてくれ」

そう言うなり、椅子から立ち上がりテキパキと準備を整える始める。バッグとクーラーボックスを両手に持っていたので、片方を受け取る。

「じゃあ、行こうか。未知との遭遇だ」

うわー、テルミンのBGM聞こえそう。

「足（移動手段）、何かありますか？」

「アンビ（アンビュランス、救急車）があるだろう」

「了解。鍵もらいます」

救急車に乗るといふ夢が叶えられるっばい、しかも運転手側ってレアだね。サイレン鳴らしてもいいよね。

「そうそう、それとな。考えておけ」

「何をですか？」

「竜の名前だよ。第一発見者だろう」

「あれ、論文書いた人間が学名つけるらしいですよ、確か」

「ふむ、そうなのか。相変わらず無駄な知識はあるな」

「ほめ言葉として受け取っておきますよ・・・それと、竜の危険性次第では退治する可能性もありますし、命名しても無駄かも」

「ふざけるな！冗談は顔だけにしろ！この新種の生物の価値がわか

らないのか!」!

「……………何か説教第2部開幕の予感です。ぶっちゃけ僕悪くないよね、うん。」

まあ、それでも楽しむとしましょう。変態紳士万歳。

竜と思惑3

怒れる女医、石井3尉を宥めながら何とか『戦車豪』に到着で、未だグース力寝てる竜を調べ始めたのだが……。

「……針が曲がった」

石井3尉の手元を見ると採血用の注射器みたいなのがあった。針の部分が根元からちよっぴり曲がっている。

因みに、竜を起こさないように小声で話しているのだが、どれだけ効果があるか。

「人間用ですからね、それ」

「迂闊だったな……、どうしたものか」

「まあ、戻ったところで、それ以外に採血用の道具無いんですよ」「うむ、こんなことを想定していないからな」

そりゃそうだ。動物病院ならともかく、竜の採血なんてのに対応できる衛生隊なんて有り得ない。

さて、そんな中で便利な言葉が一つ。

「何とかしろ」

「ハイハイ」

足らぬ足らぬは努力が足らぬ。

釣りをしていた時のままの服装で良かった。

釣りするときには必須なアイテムが一つある。刃物だ。

魚の血抜きやら必須なのである。

で、今手元にあるのは『ガーバー アップルゲート フェアバーン

コンバット フォールダー』、折りたたみ式の両刃のナイフだ。

まあ、俗に言うダガーナイフなのだが、片方の刃は研がれていないのでダガー風味の片刃のナイフだろう。

既に十年近く愛用しているのだが、ステンの刃は未ださび一つ無い。

日本ならば、実用品というよりも趣味の観賞用のナイフなのだが、僕の場合はガシガシ使っている。魚を捌いたり、野菜を切ったり、

ナイフマニアが見たら憤怒の表情を見せるであろうガス缶の底に突き立ててガス抜きも何度も行っている。

で、そんなナイフを取り出して、一瞬で親指で刃を起こす。消毒のため刃の先端を一瞬ライターの火であぶる。

「採血の準備お願いしますね」

「頼む」

消毒用アルコールでふき取った竜の尾の先端にある鱗と鱗の隙間にナイフの切っ先を押し当てる。一瞬の抵抗があるものの、竜にナイフは突き立った。とは言っても、針が入る程の穴だ。

「出来ました。どうぞ」

「わかった。手短に済ます」

正直、竜が何時目を覚ますか気が気でない。

意図はともかく、危害を加えていると判断されても仕方が無いのだ。

「……血管が何処にあるかわからないのだが……」

「……それ、正確に血管に刺さらないと採血できないんじゃないですよ……」

「……実はそうなんだ」

げんなりした。

「いや、少しずつだが溜まってはいるぞ。量と圧力が足りないので時間がかかるが」

「どれくらいです？」

「1分……いや、2分か」

「……永遠にも等しい。竜のイビキが徐々に小さくなっている気がする。起きる兆候かもしれない。」

「……よし。一本は採取出来た」

数十cc位の血を手に入れることが出来た。

「離れましょう」

「もう一本欲しい」

「安全第一です。そろそろ起きますよ」

「それでもだ」

そして、もう一本採血用の注射器もどきを竜に突き刺そうとするが……。

「……傷が塞がっている」

「嘘でしょう?」

「見てみる」

「本当に痕が無いですね」

「欲をかいても良くないようだな……。帰るとしよう」

「了解」

間一髪というべきか。竜から離れた途端に、竜は目を覚ましたようだ。

「少し見ることにしませんか?」

「そうだな。どんな行動をするか興味がある」

横穴からソソゴソゴソ後ずさりしながら這い出てくる竜を観察する。

寝ぼけ眼のように見える竜は、外に出た途端^{アクビ}欠伸をする。

「興味深いな」

「欠伸をしてるようにしか見えませんが」

「それが重要なんだ」

「はあ」

「いいか、生物の無意識に行う行動には全て意味がある。例えば、今の欠伸は酸素不足とか睡眠不足等色々な意味がある。全て記録しておかねばならん」

「じゃあ、デジカメで動画撮りますか?」

「今すぐ撮れ!!!!!!」

突然の大音量に竜ビックリ。こちらにようやく気がついたっぽい。

「あーあ、やっちゃった」

蛇ににらまれた蛙ならぬ、竜ににらまれた人間になったっぽい。そろそろ慣れてきたけど、心臓に余りよろしくないよね、これ。

竜と思惑4

「よう」

右手をシュパツと上げて挨拶。

竜も一声鳴きつつ右前足を上げて挨拶。

「寝床どうよ。気に入った？」

尻尾の振りからすれば、中々ご機嫌そうである。

「それは良かった。何か足りないものがある？ある程度善処するけど善処イコール頑張ったけど駄目だったの言い分けが出来るようになって事は考えてないぞ。多分、おそらく、きっと。」

と、竜は周囲を見渡したかと思うと、寝ていた横穴とは別の横穴に潜りこむ。

中からクリーム色の金属製の箱型ロッカーを引っ張ってきた。

高さ2mくらいのロッカーも竜にかかったら、小さな弁当箱といった感じだ。

で、そのロッカーを扉の部分を上にして倒したかと思うと、扉をガリガリ引っ掻きつつ、こちらをチラチラ見てくる。

「えーと……どうしろと」

次いで竜は扉を爪でトントン叩く。

「ああ。開ければ良いのか」

鍵穴に刺さったままの鍵を回し、銀色のロックレバーを押し上げロッカーを観音開きにしてやる。確かに、大柄の竜には、このような細かい作業は無理だろう。

「……いや、もう竜がロッカーを開くことが出来るものと理解していることとか、不思議に思っても時間の無駄なので考えないようにしてる。」

「これで良いのか？」

竜は首を振り振り満足げだ。

そして、観音開きされたロッカーの中をうかがうと、うれしそうに

のどを鳴らす。

「何かあるのか？」

ロツカーの中を覗いて見ても何も無し、放置されていたのに綺麗なものだ。

それなのに何を嬉しがるのか？

それはともかく、これってまるで弁当箱みたい。

と、唐突にわき腹を指で突かれた。

「あひい！」

思いもよらぬ奇襲に思わず声が……。

「きもい、死ね」

相変わらず、S系女医石井3尉は素敵です。

「ひどい！散々弄んだのに罵声ばかり！でも、そこが好き！」

「戯言に付き合う気はない、余裕は無い。一つ聞くと竜と会話が出るのか？」

「え？」

「え？」

思わず石井3尉と僕は両者キョトン顔。竜に顔を向けてもキョトン顔。空気が読める奴だ。

「出来るわけじゃないですか、馬鹿なの？死ぬの？」

「くっ、でもあんなに意思疎通できてるじゃないか」

「ただ単にノリとアドリブですよ。ねー」

最後の「ねー」は竜に向けたものだ。

竜もうんうんという感じに首を縦に振る。本当に空気が読める奴だ。てか、お前日本語わかってるだろ。

「いちいち貴様らムカつくな。少し静かにしろ」

「権力をかさききてパワーハラはんたい！ねー」

竜もうんうんという感じに首を縦に振る。本当に本当に空気が読める奴だ。てか、お前中の人、日本人だろ。

あ、ちなみにパワーハラとはパワーハラスメントの略で上司が権力を武器に部下に嫌がらせをすることです。ここ試験に出ますよ。

「パワハラだと！人聞きが悪い！私がそんなことをするわけが無かるう」

「今さつき親指折られかけたんですが！竜さん、どう思われます？」
竜は何か反応にすげー困ってるっぽい。それはともかく、石井3尉とも普通に意思疎通できてる気が・・・。

「ほら、竜もすっかり引いてますよ」

「そ、そんなことは無いよな」

あ、竜は我関せずといった感じでプイスツとそっぽ向いた。グツジヨブ！あんた良い仕事してるぜ。

「・・・ギルティー（有罪）」

満面の笑みで宣言する。多分天使の笑みだね、これ。

「そんな馬鹿な・・・」

「判決を言い渡します。終身刑。貴方は僕を永遠に愛するけ・・・
くほお！」

「調子に乗るな」

炎を吹くようなボディーブローが叩き込まれる。レバーに一発良いのが入りました。思わず崩れ落ちる僕。文字にするとorz。

「はひ・・・」

「ん？痛みで息も出来んか？」

「！！・・・」

「！！？」

「ご馳走様です！美味しくいただきました！ありがとうございます
！」

満面の笑みでスツクと立ち上がる。痛みとはすばらしい、生の実感が得られる。

対する石井3尉はうわあって感じで引いてる。

「そろそろ、その芸風止めてくれないか。正直・・・きつい」

「あ、はい」

てつきり律儀に反応してくれるから気に入ってると思ったんだけど
なあ・・・。乙女心って複雑だね！

「そろそろ真面目にいこう。竜が何かやるようだぞ」
竜も夫婦漫才に飽きたのか既にこちらを見ていない。なにやら集中している。

「ロッカーをじっと見つめて何するつもりですかね。弁当箱にでも使うつもりですかね。匣の中には魚がみっしりと……」

「ほう」

「まあ、何をしてもおかしくないですが」

「確かに、色々と常識はずれな事をしてきた。もう何をしても驚かん」

「では、竜が何をするか拝見しますか」

「おい！？見る」

急に大声を出した石井3尉の方を向く。

その一瞬目を離れた瞬間、その間にロッカーの中は透明な液体で満たされていた。

何が起きたかはわからない。でも、竜が何かをやったのだろう。

そして、それを見ていた石井3尉はというと……。

「嘘だっ！」

驚いてるじゃん。嘘つき。

竜と思惑5

古来より日本人にとっては竜とは何なのか？

神・・・そう言っても違いは無いだろう。

正確には、自然の象徴の一つだ。

有名なところで、地元の伝説なので馴染み深いヤマタノオロチ伝説がある。

チヨイ悪神様のスサノオさんが生贄になるはずだった少女を娶るために、ヤマタノオロチを酒で酔わせた後、暴行を加え殺害し、殺害後死体を解体中に尻尾から剣が見つかるという猟奇的な伝説だ。

さて、これをヤマタノオロチ伝説を現代風に解釈すると『川の氾濫を抑えて、生贄の風習を無くし、川から採れる砂鉄で剣が出来るようになった』となる。

川なんてサイズのもが竜に例えられるのだ。それと釣り合う竜の凄さがわかる。

まあ、ヤマタノオロチを竜に加えるのはいささか微妙になるけれど。あとは、竜神に祈祷して雨を降らしてもらって飢饉が防がれたという伝説も日本各地にある。

因みにこれも現代風に解釈すると「火を盛大に焚いて空気中の不純物を増やして雲を発生し雨を降らす確立を少しでも上げる。或いは偶然」となる。

だが、竜が実在するのならばどうなる？現代風に解釈する意味は・・・薄くなる。実際にあった事かも知れないのだ。日本の歴史に介入している可能性は高い。それにより日本の古代史の解釈がどうなるか・・・正直想像つかない。

もともと、日本に伝わった竜という概念は、どちらかといえば中国から伝わってきたものだ。中国での竜は権力の象徴、そう言っても過言で無いほどの凄いもの。中国にも過去存在していたかもしれない。

西洋でも最強の怪物といえば、龍しかいない。悪魔もやばいが直接的な破壊力では劣る。悪魔はどちらかといえば人間の精神に作用するが、力の強さは竜のほうが強い場合が多い。西洋においては邪悪で恐るべき存在・・・それが竜だ。ここでも存在していた可能性がある。

それ以外にも、世界各地に竜の伝承はある。それらは全て、竜は人間では及びつかない偉大な存在ということが共通する。

そのような存在が・・・ラブリーでプリチーなのはこういうことでしょう。

目の前に竜がいる。その竜はその巨体にとっては少し小さな水皿のロッカーから水をピチャピチャ舐めとってる。結構可愛い、ラブリー！。

因みに水なのは舐めて確認したので間違いない。「ペロ・・・これは青酸カリ！」って呆けたら石井3尉に殴られました。いやまあ、アーモンド臭してないしなあ。因みに水は軟水、硬水というより、むしろ蒸留水。不純物一切なし。

そうそう、猫とか犬とかのユーモラスな姿を撮った動画は一部で^{アニメ}VR^{レシテオ}って呼ばれてるらしい。竜の水を飲んでいる姿は、それらに匹敵するくらいに可愛い。俗に言うギャップ萌え。不良が捨てられた子猫を拾ってたら胸キュンだよな？そんな感じ。

問題は・・・飲んでる水をどうやって集めたかだ。空気中の水分を集めた可能性が高いがどうやって？手段は色々思い浮かぶが、一瞬しか目を離してないのに出来るものはない。ロッカーの容量は概算で1トン近くの水が入る。空気中の水分を手に入れるのは僕の思い浮かべるだけで二つ。

空気を凝縮させて、不純物たる水分を取り分けるのが一つ。コンプレッサーのタンクに水分が溜まるのと同じだ。

もう一つは、空気より低い温度の物体を用意して、それに空気中の水分を付着させる方法だ。よく冷えたビールのグラスに水滴が付着

するのと同じだ。

だが、それらと今回は異なる。それらを行った痕跡が一切無いのだ。気圧の変化、気温の変化は一切感じられなかった。

それなのに、水分を集めるのはどうやって出来るのか？わからない。ならば、その状況で水を集めるか作りだすのは何と呼べばいいだろう。

奇跡か魔法の二択。

物理法則を無視したナニかを表すにはそれしかない。

だが、それでもわかることがある。

この竜マジ可愛い。今度動画をネットに上げてみよう上位に食い込むはずだ。

この可愛さは人類全体で見るとべきだよね！！

竜と思惑6

いやあ、癒された。ご馳走様でした。

今の僕は恐らく満面の笑み、さぞかし肌はツヤツヤテカテカと輝いているはず。

動物を眺めるのって本当に素晴らしいですね。

実は硫黄島には他にも猫という最高の癒し生物がいたりする。何時誰が持ち込んだか知らないけれど住み着いているのだ。環境と食生活によるのか、少し小柄なのが特徴。

食堂付近、隊舎（隊員が住んでる宿舎）付近等それぞれ人間の近くに住み着きおこぼれを貰って生きてるのは確認できただけで10匹程度。島内を歩いていると、たまに野生に返ったのも何匹が見る。野鳥、とかげに野鼠等、餌は意外に豊富なのかもしれない。

人間の近くに住んでいる猫は、生死がかかっているものでものごく人間に媚びる。たまに街中で見る猫にも無防備というか、人間に警戒心が無いのがあるんだが、それよりも更に凄い。近くによっても逃げないどころか、おさわり自由、むしろ猫の方から寄ってくるのだが・・・何だか癒されない。

生きるために必死なのがわかりやす過ぎて、素直に可愛がるのも罪悪感が沸くのだ。

なので、たまに釣った魚の捌いた残りをあげている。本来は禁止されてるんだけど、妙に忍びなくて・・・ねえ。

それに対して、竜って生き物は実に良いです、はい。

完全無欠、高い知能を持った生物に見せておいて、時たまとる行動が実にラブリー。

頭が良いのに妙に間抜けな行動とったり、見ていて目が離せない。

かっこいいのに可愛いというは反則です！許せねえ！でも、愛らしから許しちゃう！竜は大変なものを盗んでいきました！私の心で

す！

あ、因みにここまで竜が胸キュン（死語）なのは行動が何か犬っぽいからなんですよ。ぶっちゃけ、僕は犬と猫なら犬派です。

竜の行動を見ると、血統書つきのジャーマンシェパードなのに妙にアホの子で、誰にでも懐く警備犬失格気味のかつての同僚を思い出して、つい苦笑い。

数年前、観閲式（陸海空3自衛隊が毎年交代で行う式典）の臨時勤務で基地警備要員になった際にデビル号（百里基地所属警備犬、階級は3曹）と相棒になった際に、飼育係の警衛隊の人に引かれるくらいに猫かわいがりした思い出が・・・犬なのに猫かわいがりとはこれ如何に。

あいつ元気かなあ、相変わらず強面の癖に甘えん坊な気がするけど、もう高齢だろうしなあ。案外落ち着いているかもしれない。当時は本当に腕白の盛りで、全力体当たりで押し倒した拳句、顔舐めを何度食らったことか。人生の中で押し倒された経験はあれが唯一だったり。唾液でベトベトにされて「もうお婿に行けない！」と何度思ったことか。実に衝撃的で素晴らしい体験でした、はい。

あ、念のために言いますが僕はケモナーの気は無いですよ？

ただ動物がちよっぴり好きなだけですよ？本当だよ？犬耳少女と犬どちらがいいかと聞かれたら、数日悩むくらいなレベルなだけです？

「しみじみしてるところ悪いが・・・そろそろ帰らないか？そろそろ日が落ちる」

「え、もうそんな時間ですか？」

竜と別れた後、衛生隊に帰ってきてからも長々と話し込んでしまった。

ただし、竜の情報が圧倒的に足りない。憶測と推測を話し込んでいくように何とも不毛に感じられる。

「食堂も閉まってしまったぞ。夕食メニューはホツケの干物だからそれほど気にならんが」

昼夕は大体肉と魚がランダムで出る。因みに魚は大体不人気。

「僕も釣りに行ってたんで昨日から何も食べてないんですよ。呑みます？」

水分だけはとっていたが、色々と忙しくてまともな食事をしていなかったのを思い出した。思い出した途端、急にお腹が減ったような気がする。我ながらげんきんなものだ。

なので、夕飯を兼ねた酒宴を提案する。

「私から言おうと思っていただけだが、手間が省けた。そちらは何を用意する？」

珍しい、毎回こちらから宴会の提案しているのに今日は乗り気のようだ。

酒でも飲んで、竜から気分を切り替えたいのであろう。

まあ、何はともあれ承諾を得られた。

こちらの手持ちの食材と賞味期限を勘案する。

自衛隊の基地には大体『隊員クラブ』と呼ばれる飲み屋があるが、硫黄島にはそんなものは無い。

硫黄島での宴会とは、屋外のバーベキュー場か、隊舎の曹士用と幹部用の調理室兼娯楽室に酒と料理は持ち込むのが定番。

お酒については、一部銘柄のビールと焼酎についてはB X（売店）で売られているが、好みの酒と食材については休暇が終って硫黄島に帰ってくる際に手荷物で輸送機に持ち込むしかない。つまり、食材は硫黄島においてお金で買えない価値がある。プライスレス。

「とりあえず、刺身を少々。カニの味噌汁とカニの唐揚げも少しは食事を兼ねるのならば、つけ麺が出来ます」

刺身は今日釣った魚一匹分なので、前菜にしかない。

カニは硫黄島の南側の海岸の岩場付近で大量に捕れる。20cm位のクラスだが、唐揚げと味噌汁にするなら十分だ。

棒ラーメンは大量にあるのでこの際消費したい。スープにはカニの出汁で少し手を加えれば実にいい味になる。何より、呑んでる最中の麺類は最も人気なメニューなのだ。

「了解した、締めで炭水化物はほしいのでつけ麺も頼む。こちらはパイヤと月下美人の炒め物と海草サラダを出す」

パイヤは硫黄島に自生している。ただ、甘みは無いのでフルーツ感覚で食べれない。炒め物に使うしかないが意外に美味い。

月下美人も硫黄島に自生するサボテンの一種だ。少し青臭いが調理次第ではそれなりに美味い。

海草サラダも硫黄島の呑みにおける定番メニュー。フリーズドライの海草と山菜を水で戻してドレッシングをかけるだけだが、生野菜がほぼ入手できないこの島では数少ない呑みの最中の癒し系だ。

「そうそう、それとな。頼んでた日本酒も持って来い。こちらは焼酎を持ってくる。美味いぞ」

「了解しました。それとですが、田中2尉は当直なので顔出しはすると思いますが、多分来れませんよ」

「ふむ、それなら当直室に近いし、曹士用の娯楽室に19時集合で良いか？」

「まあ、聊か早いですが調理しながら呑めば良いですしね。それじやあ、帰ります」

「ああ、美味しい料理を期待している。では、後程な」

別れて衛生隊から出ると、外は既に茜色。夕焼けに照らされた海とすり鉢山が美しい。

宴会について考えながら、帰路に着く。

「ふと、石井3尉との二人きりの呑みなのではないかと気がつく。

大体、田中2尉と石井3尉と僕の三人で呑んでいることが多い。なので、二人きりというのは実は今回が初めてなのだ。

何という幸運！僕にも春が来たというのか！

神様ありがとう、今月の勤務割り当て割り振った人間マジゲツジョブ、竜もついでにありがとう、夕日も笑っている、ガイアが俺にもっと輝けと囁いている。

様々な無言のエアールに支えられて、僕は高らかに宣言する！

・・・・・・・・・・僕幸せになります。

それから、一時間後。

「遊びに来たヨ！」

一言挨拶しながら入った娯楽室には・・・・・・・・硫黄島のお偉いさんが勢ぞろい。

うん、わかってた。こうなるって。悲しみよ、こんにちは。幸せよ、さようなら。

僕の石井3尉とキャツキャウフフ計画はあえなく頓挫した。

竜と思惑7

(前回のあらすじ兼、現実逃避中)

「遊びに来たヨ！」

娯楽室の扉を開けた瞬間に、挨拶一発。空気が止まる。

石井3尉しかいないと思ってラブラブチュウチュタイムを楽しみにしていたら、基地のお偉いさんが集まっているという罠。

オッス！オラ2曹！周りから哀想なイキモノを見る目で見られてる状態だつてのになんだかすっげえワクワクしてきたぞ！

ごめん、うそ、死にたい、穴があったら坑道戦術で爆破したい。

地球のみんな！オラに元気を分けてくれ！！

(現実逃避終了)

「失礼しました。てつきり、石井3尉しかおられないと思っていましたので」

急遽、真面目モードにチェンジ！イエス！アイキャン！（自己暗示）
下手のこととして、昇進とかボーナスの評定に悪影響が出たらマジ困る。

「部下の心情把握も職務の一つなんだよ。それと、つい酒の香りに誘われてな」

と、空自司令。もう少し言い訳を考える。

「・・・3幕統合運用の一環だ。・・・ここに来れば、美味いつまみが食えると聞いたんだが」
と、海自司令。

因みに硫黄島は海自の基地で、空自は間借りしてるだけです。
なので、海自の司令が実質硫黄島のトップと言えます、はい。
あと、もう少し言い訳を考える。

「この島では、うちは余り周りと関わりはないのでいい機会でしたので。あと、綺麗な女医さんがいると聞きました」

と、陸自の1曹。

不発弾の対処のために、少数の陸自の隊員が常駐しているのだが、食堂で時折見たことがあるだけで直接の面識は無い。

とりあえず、上半身は戦闘服、下半身はジャージという服装・・・通称『ジャー戦』のおかげで、階級やレンジャー徽章、空挺徽章等がわかった。

EOD（爆発物処理・Explosive Ordnance Disposal）要員のはずなのに、なぜ空挺徽章をつけているのかは謎だが。

そろそろ慣れたが、もう少し言い訳を考えろ。

「……………」

石井3尉は無言で、空気嫁ならぬ空気読めといった感じで、視線を送ってくる。

いや、この状態なら僕みたいな馬鹿でも状況はわかる。

呑みと称して、ブリーフィングを行うつもりなんだろう。

仕事に関係のあることならまだしも、対象が『竜』だ。

酒を飲まなければやってられないとまで言わないが、空想の産物みたいなものの為に正式な会議を開くのも考え物なのだろう。

ならばまあ、空気読んで合わせるとするか。

「おや、誰もまだお呑みになっておられないようですね。のどがお渴きでしょうし、乾杯いたしましょうか？」

持ってきたクーラーボックスの中から缶ビールを取り出して全員に注いで回る。『とりあえずビール』なのは、3自衛隊共通なのか誰からも文句は出ない。

ところで、この酒代とかって全部僕が負担するんですか、そうですか。

「海自司令、乾杯の音頭をお願いします」

「……皆さんのご多幸とご健勝を記念して乾杯」

「乾杯！！」

グラスの中のビールを一息にあおる。

冷たいロープが胃に一直線に落ちていくような感覚。舌先に残る炭酸の刺激と心地よい苦味。ああ、生きているって素晴らしい。

「そうそう、少量ではありますが、おつまみも用意しているので、賞味ください」

そう言っつて、本当に少量の刺身が盛られた皿をテーブルに置く。

「・・・今日の釣りは不調だったのだね？」

「かなり釣れたんですが、色々ありまして・・・。少しお待ちください。面白いもの撮ったので、デジカメとって来ます。酒の肴にぴったりですよ、ええ」

「・・・楽しみにさせてもらおう」

「では、少々お待ちあれ」

断わりを入れて娯楽室を退出する。

全力疾走で部屋に戻って、デジカメとケーブルを取り出す。

それと、私物の工具箱から、やたら柄が長くて、細身のハンマーを取り出す。

コイツの通称は『点検ハンマー』。ボルトやナット、ネジの頭を叩けば感覚的に緩んでいるかわかる代物だ。

今回は、ハンマーのヘッドが片面が尖っていると、柄の長さが重要なのでこいつを使う。さて、準備は整った。

色々と小道具の準備も必要だが、次は情報を集める必要がある。

本来、今回の宴会は個人的なものはずだった。それが、このような事になるならば、何処かで誰かがそのように誘導したと考えるべきだ。まあ、その犯人はわかってるが。

「入ります」

「どうぞ」

当直室の扉をノックして入室する。

「そろそろ来ると思っていたよ」

そう言っつて、当直室に置き忘れていた竜の鱗を差し出してくる。必要だったので受け取る。

「宴会の情報バラしました？」

「うん。色々と考えたけどこれがベストだったんでね」
「やっぱり、犯人コイツか。」

「オレサマオマエマルカジリ」

「ビール2ケース」

「吊るす」

「ビール4ケース」

「許す」

「許された」

「ついでに、つまみの食材が足りないので何かください」

「後で持つていくよ」

色々と言いたい事があるが、まあこれぐらいが引き出せる限界か。

「ところで、何処まで情報は話しました？」

「掻い摘んでしかね、細部まではとても手が回らないよ。あと、

島の外には一切情報流れてないはずだよ。」

「わかりました。じゃあ、戻ります」

「ご武運を」

「靖国で会おうぜ」

笑顔でサムズアップ。ついでに、微妙に死亡フラグ立ててみる。

さて、手札は少ないけれども準備は整った。

お偉いさん相手に小気味でウィットに富んだジョークを含んだト

クを繰り広げることにしましょうかね？

竜と思惑 8

「お待たせいたしました。酒の肴をお持ちしました」
さて、どう攻めよう？多少用意はしたが、残念ながら決め手にかける。

「・・・で、どう楽しませてくれるんだね」

口火を切るのは海自司令。そういえば、色々と準備をする前から海自司令が専ら喋っている。これは興味の現われと見るべきか？あるいは、空自司令にはある程度情報が伝わっているが、それ以外には伝達されていないと考えるべきかもしれない。そうすると、陸の1曹の立場がどうなるか気になるが・・・。

まあ、どちらにしろやることには変わらない。

デジカメとテレビを接続。動画再生モードにする。さて、とくとご覧あれ。

「少し次のつまみを作っていますので、お暇つぶしにどうぞ。ご質問は石井3尉にお願いします」

面倒くさいものは幹部に丸投げするに限る。石井3尉には色々と説明してあるので、大体の応答は出来るはず。

で、こちらはビール片手に部屋の一角の調理スペースでカニの味噌汁と漬け麵の準備にかかる。

竜の動画をテレビが映し出したのだらう、誰が発したかわからないが、色々と聞こえるが全部無視。

・・・念のためにエロ動画がテレビに映し出されていないか一応確認した。時たま、プレゼンでマジでエロ動画流しちゃうやつっているらしいし。世界って広いな。

まあ、そんなことをつらつら考えながらも手はしっかりと動かす。カニを真っ二つにしたり、器を用意してスープの素を適量に器に取り分ける等細々した作業、そんな下ごしらえを大急ぎで済ませる。

漬け麵自体はお湯が沸けば一瞬で出来る。茹でる麵の量が多いので、

少し湯を多く沸かす以外は手間は無い。後は麺を茹でて冷水で締めただけだ。

味噌汁も手軽に出来るが出すタイミングを選ばないといけない。飲み会で何度か味噌汁は作ったのだが、宴も終盤になってきた頃に濃い目の一杯を出すのが一番受けが良かったのだ。

つまり、現状はもう余りすることが無い。

タオルで手を拭きつつ、竜の動画を見ている人間を観察する。

反応は人それぞれ。

空自司令は薄く微笑を浮かべて色々と質問している。海自司令は硬い表情で無言。陸自の1曹は満面の笑みで色々と満足そうだ。石井3尉は淡々と質問に答えていくといった感じだ。

もう少し細かく観察する。空自司令には少し余裕めいたものが感じられた。事前にある程度の情報を知っていたようにも見える。それに対して、海自司令は当初は呆気にとられていたものの、今は竜の存在が半信半疑なのか動画を硬い表情でじっと見つめている。そして、それらを陸自の1曹は大層面白い出し物のように楽しんでいるといった按配だ。階級、立場的に責任を負う必要が無い余裕の表れかもしれない。それと、我が愛しの石井3尉はというと淡々と質問に答えているようで、実は結構必死っぽい。何せ、情報が少なすぎるのだ。質問に答えられるほどのストックは無い。

と、家政婦は見た的に、陰でニヤニヤ観察しながら調理してる間に動画も終りそう。

さて、頃合いだ。

「お待たせいたしました。本日のメインディッシュです」

聊かおどけてレストランの給仕風な所作をしつつ、漬け麺の器をテーブルに置いていく。配り終わった後によやく着席。一応、今日は休日のはずなのに、働いてばっかりな気がする。

「ところで・・・」

「すみません、今日まだ何も食べてないんです。一口だけ、一口だけでも」

「ああ、うむ」

麵をゴツゴツ取り、一瞬だけ汁に漬け一気にすすす。

最初に感じたのは胡椒。続いて、舌先に塩と、その他の調味料。最後に、カニの風味と麦の香りが感じられる。硬めに茹でた麵は絶妙な歯ごたえ。乾麵の癖に美味い！ああ、五臓六腑に染み渡る！改めて、自分が空腹だったのを思い出す。

当初は一口だけと思ったつもりが、二口三口と手が伸びる。いや、男って全員先っぽだけ先っぽだけ、とか言っというて全部するよね？それにつられされたのか、全員が麵に手を伸ばし始める。

全員、一言も喋らない。ただ、麵をすすする音がするのみ。

10人前茹でたはずが、一瞬で消える。

ぶっちゃけ、作った人間としてうれしいのです。でも、明らかに需要と供給のバランス足りてないんです。このペースだと更に10人前は必要っぽい。ある程度、乾麵のストックはあるとはいえ、これ以上正直厳しいのです。硫黄島でのつまみってマジで貴重品なんです、はい。

「つか、石井3尉食いすぎ、太るよ。」

「・・・今度幹部会の宴会があるのだが、これ作ってもらえないか海自司令が身を乗り出して、尋ねてくる。」

「すみません、材料のストックが無いもので」

「・・・そうか」

かなり海自司令は残念そうだった。

「麵は代替品になりますが、インスタントの麵で何とかかなりますので代用できます。汁の素は余っているのでお渡しできます。味は落ちますが、麵さえ確保していただければ何とかできます。」

「・・・ありがとう・・・最近、幹部会のつまみは飽きていたのだ」

何というか、スゲー切実そうだった。普段何つまみにしてるんだろ

う。ぶっちゃけ、酒のつまみなんて岩塩舐めとけば満足な自分には無縁

な悩みだった。

「ところで、このデジカメで撮っていたアレは本当に存在するのかね？」

「確実に」

「まことに申し訳ないが・・・正直、どうにも信じられん」

「疑問はもつともだと思えます。なので、こちらに証拠を用意してあります」

そういつて、バッグの中に入れていた竜の鱗を海自司令に差し出す。存在が存在なので、色々と疑われる可能性があるのは当初から懸念していた。

竜の鱗一つでは少し信憑性には欠けるが無いよりましだ。

「これが例の生き物の鱗か・・・。。どうやって手に入れたんだね？」

「あげた魚のお礼でくれました。ご冗談に思われるかもしれませんが、本当です」

と、空自司令が口を挟む。

「それが本当だとするならば、こちらから色々と与えていけば対価をくれると考えていいのかな？」

「現状ではわかりませんが、可能性はあります。それに、あの竜は役に立ちますよ」

「具体的にはどう役に立つ？」

「短期的には、この島の水不足解消。長期的には・・・かなりの利益になる技術が手に入る可能性があります」

「動画にあったアレか」

「はい。どのような手段か不明ですが水を生み出していた事です」
ロッカーの中が一瞬で水で満たされたのだ。本気を出せば、どれほどのことが出来るか・・・。あるいは、それが水以外にも出来るとしたら？例えば・・・

「アレが石油だったとしたら、面白い事になると思います」
多分僕は悪い顔になっている。半ば意図したものだ。

「……それは発想が飛躍しすぎだ。それに、そこまで考えるのは職分に余る。我々が出来る範囲を超えている。その話はこれで止めだ」

「はい」

ジャブのつもりだったのが、良い感じに入ったようだ。

「いいでしょうか？」

石井3尉が発言の許可を求める。少し前から何やら深く考えていたようだ、ようやく決心がついたようだ。

「ここはただの呑みの席だよ。かしこまる必要は無い、ざっくばらんにいこう」

空自司令はそんなことを言うが、こちらとしてはそれは無理だ。結構冷や冷やもんである。

「エイズの……いえ、全ての病気に対する特效薬として期待されているものをご存知ですか？半ば、眉唾ですが」

僕も含めて全員が首をかしげる。なぜ、ここでそんな話が？

「ワニの免疫機構です。不衛生な環境下で、四肢の一つを失うような怪我を負ったとしても病気になることなく生き残るような驚異的な免疫力がワニにはあります。それは、形状や性質が変化しやすいエイズウイルスですら余裕で駆逐するくらいです。ワニの免疫機構の研究は次世代の抗生物質として研究されています。ですが……」

「ですが？」

思わず、続きを促す。段々と結論がわかってきた。

「ですが、ワニの免疫機構は余りにも強力すぎるので、直接人体には適用できないのが現状です。ところが、竜ならば……出来るかもしれません」

「……どういう意味だね？」

海自司令が静かな口調で言う。

それに対して石井3尉は迷ったような表情を見せた。確かにまあ、医療従事者が根拠無い事など軽々しくはいえないだろう。なので、

引き継ぐ。

「あの竜が神話などに出てくる竜と同一かどうかは不明です。ですが、同一の種だった場合、神話の内容の一部が本当だった可能性が
あります」

「………さあ、これ言ったら馬鹿呼びわりだぞ。」

「神話などで、竜の血を浴びたものは不老不死になったりします。実際に不老不死になるはずは無いのですが、竜の血が何らかの影響を及ぼした可能性があるかもしれません」

「………。石井3尉を除き、全員石を呑んだような表情になる。それに畳み掛けるように更に言葉をつなげる。

「血液のサンプルも、とってあります」

「………。明日は定期便が来るので人間（人間基地、埼玉県）に下ろしてもらおう。鱗共々送ることにしよう。海自司令いいですか？」

「ああ、中病（自衛隊中央病院、東京都）ならこちらから送るより、そちらのほうが近いしな」

「了解しました。ならば、明日空輸する際に積み込んでおきます」

「そうしてくれ」

何とか無事に乗り切った。憶測と予想で利点ばかりを言うことで畳み掛けるといふ、半ば反則気味だが。このままなら情性でいくだろう。

そう思った時だった、今まで沈黙を守っていた陸自の1曹が唐突に声を発する。

「盛り上がっているところ申し訳ありませんが……竜が何かしたときの対策はいいんですか？具体的には………竜をぶつ殺す方法は？」

「………呑みの席はまだまだ盛り上がりそうだ。」

竜と思惑9

「盛り上がっているところ申し訳ありませんが・・・竜が何かしたときの対策はいいんですか？具体的には・・・竜をぶつ殺す方法は？」

まあ、来るだろうなあと思っていた。

でも、ストレートに言いすぎでしょ、これ。もうちょっと、対処とか色々と言葉を選んじやってくださいよ。せめてプチ殺す位にして欲しいものである。

まあ、それはともかく重大な問題がある。

ビールを一口含む。うむ、美味い。これから少し口を開くことになるので喉を湿らせておくのは大切だ。

「まだ、現時点では竜は何も問題を起こしていません。いやまあ、僕の魚食われましたけど」

自衛隊が動くには根拠が必要だ。具体例を出す。

自衛隊が防衛出動する際は、自衛隊法76条に基づき国会の承認、事後承認により総理が命じて自衛隊が出動できる。

その他、自衛隊の行動は全て法によって決められている。自衛隊の基地内では原則禁酒つてのも自衛隊法にのってたはず。ぶつちやけ悪法じゃね？

因みに、武器使用規則・・・ROE(Rules Of Engagement 交戦規定)も自衛隊法にのっている。

あ、偉そうなことってますがうる覚えだからね？昇任試験の試験勉強でたまたま覚えてただけなんだからね！勘違いしないでね！気になる人はネットの法令データ提供システムで調べてね！

それに対して反論はというと。

「まあ、根拠はこの際置いておきましょう。何かあったときに備えるのも必要だと思うので。正直、自衛隊法95条の『武器などの防護』と『施設の警護』で何とかかなりそうですが」

陸さん曰く、根拠？そんなの関係ねー！そんなの関係ねー！だった。大事なことなので2回言いました。

「そうですね。人が対象の法なので人以外のものなら、正当防衛が緊急避難しか武器等の使用が許されていない場合でも使用できるかもしれません。既に前例がありますし」

因みに前例というのは、怪獣退治ならぬ海獣退治とか色々やってる。病気だか寄生虫持ちの大量発生した貝を火炎放射器でヒヤッハーしたこともあったりするから凄い。リアル汚物は消毒である。

「ならば、幾つか試案を持っていても良いでしょう。被害の局限が重要ですから」

「そうですね。ならそれを話す前に見ていただきたいことがあります」

脇に置いたりユックから取り出すは『点検ハンマー（自称猫型口ポットの口調で）』。

周りは人間は1人を除いて全員困惑している。陸自の1曹だけは理解したようだ。こちら辺は現場で働いてないとわからないだろうしなあ。

点検ハンマーの普通のハンマーとの違いは、柄が細く長くてハンマーヘッドの片面は尖っていることだろう。

ボルトやナット、ネジの頭を叩いて緩んでいるかを確認する工具なのだが、このハンマーは本来の用途以外に重要な使い道がある。スプレー缶の穴あけである。

本来は小さいボルトとかを正確に叩くために尖っている片面で軽くスプレー缶の底を叩いてやると、簡単に穴が開いてガス抜きが出来る。ただ、応用動作（整備において基本と異なる方法、手段。故障や不具合の原因になったりする場合がある）なので、本来がやつちやいけないのだが……。楽しだね。

まあ、そんな代物である。で、今からするのはボルトとかを叩くわけでは当然無い。叩くのは、竜の鱗だ。

「それではいきます」

床に置いた竜の鱗にハンマーを振り下ろす。

叩いた瞬間に生じた音は予想と少し違っていた。

鉄板を叩いたときのような音がすると思っていたのだが、高音で後を引くような音が少し聞こえただけだった。

結果は予想以上だった。

竜の鱗にクラック（ヒビ）どころか、一切傷が付いていない。指先で竜の鱗の表面を探れば、凹みすらもないのがわかった。

……何食えばこんなものが生えるんだか。

そう思いつつ点検ハンマーのほうに目を向ける。

……尖っていた先端が少し平らになってた。

ありえねえ。

あと、少し凹む。この点検ハンマー私物だし高いんだけど……。

簡易硬度試験が終了したので、竜の鱗と点検ハンマーを机に置いて見てもらう。

陸自の1曹の反応は……。

「小銃……いや、12.7mmでも厳しいですね。これは……

……厄介だな」

満面の笑みである。

怖いよ、この人。ウォーモンガー（戦争狂）確定。

「この鱗……役に立ちそうとは思いませんか？耐弾試験をしないとわかりませんが、この軽さでこの硬さであればボディアーマーのセラミックプレートの代替になるかもしれませんよ」

アプローチを少し変えてみる。

近年、歩兵の装備の性能向上の反面、重量が著しく増えている。その一番の原因がボディアーマーだ。昔のボディアーマーは単純に砲弾や爆弾の破片の防御だけが求められていただけだったので、それほどの重量はなかった。

だが、近年の世界情勢は小銃弾の直撃に耐えられるボディアーマーが求められている。人の命の価値が上がったのだ。おまけに、移

動は車両がメインで荷物等は車両に積んだままでいいならば、その分の重さを他にまわしても良い。陸自の防弾チョッキ2型だけで12kgを軽く超える程だ。

数十年前では消耗品だったのが、歩兵1人の命で世論が動く社会。それが今だ。

そのような中、ひよっとしたら小銃弾を簡単に防ぐかもしれない軽量の素材がある。数が限られるとはいえ、無料だとすれば非常に魅力的だろう。

「すみません、今から竜を狩ってきます」

陸さんはウオーモンガーからモンスターハンターにクラスチェンジしたらしい。

ちよっと、やっちゃったかなあ、これ。酔った勢いの冗談だと良いんだけどねえ……。

竜と思惑10

「でも、竜を殺す方法は決まってるよ」
ドラゴンキラー、それは神話の存在。

人の身で超巨大生物を殺すのは困難だ。

マンモス、クジラ・・・人がそれを狩ろうと思ったときに使ったのは知恵だ。

落とし穴、投げやり、銛、集団戦術・・・それらをどう生み出し、運用したかは想像を超える苦難があっただろう。運用が確立した後も少なくない人間が命を落としただろう。確立する以前は何人死んだかは想像できない。

それを今からする。
当時とは違う。

確かにそうかもしれない。技術は進歩した。兵器は効率良く殺せるようになり、軍というシステムチックな暴力集団が出来た。

だが、それでもだ。

敵を知らなければ、敵に適切に対処しなければ無駄な人死に出る。情報だ。情報が欲しい。

体長、体重、好物・・・何でも良い。それらを知ることが生存につながる。

そして何より重要なことがある・・・。

戦わないですむ方法だ。

軍人を好戦的な人種だと思っている人間がいる。ああ、自衛官は不思議な法律のせいで軍人じゃないが、そこは置いておく。

基本的に、軍人ほど戦争が嫌いな人間はいない。当たり前だ。真っ先に死ぬ立場になりたい人間なんていない。

つまり、普段は死ぬための、殺すための訓練をしてるくせにそれを嫌がるという矛盾した存在が軍人だ。

さて、僕はそんな存在なので一番望むのは平和的解決。

願わくば、毎日酒とか飲んで楽しく暮らしたい。でもまあ、それですまないのが世の中の流れと、我らが組織の存在意義。

リスクコントロールとか色々と言葉はある。それらの意味は『備えよ常に』というポーンスカウトの標語が端的に表している。それは全ての組織に言える言葉。特に非常時に備えている組織にとって。つまり、何かあったときは何とかしろって意味だ。

そして今がその何かがある可能性が高いというわけだ。それでも、僕は少し待てと言う。

どうせ殺し合いをするなら、少しでも勝算を高めたいから。

と、いうのは冗談。

そんなに簡単に、自衛隊が武器等の使用が出来るわけがない。自衛隊ほどシビリアンコントロールという言葉が似合う組織は無い。

それに、某怪獣映画じゃないが多少人命に被害が出たぐらいじゃ、命令が下達すると思えない。人命より希少な生物のほうが優先されそうな気がする。政治的判断とかいうクソみたいな代物のせいだ。もともと、法律以前に、この島には武力行使できる土台が無いのだ。理由は簡単。

そんな装備と人員がない。

この島は島自体が巨大な墓標であると同時に、訓練所みたいなものだ。所在隊員は全員その管理人、基地の能力を保つたり管理するだけのためにいる人員だ。装備も訓練を支援するためのものが大半で、実戦のことなど考えていない。

ならば、この島で戦闘が出来るようにするにはどうするか？

人員、装備、弾薬、燃料、補給物資等、膨大なものを本土から運んでくる必要がある。

それもまた、非現実的。費用と時間が猛烈にかかる。

空爆みたいなインスタントな方法で片が付けばいいが、それで失敗したら楽しい事になる。

なので、竜が襲ってきたら島にいる人員はどうするか？

食料と水を大量に携行して地下壕でひたすら救援を待つ。それしかない。

もちろん、この場にいる全員それがわかっている。

だから、これから言うのは戯言。

思考実験という名の頭の体操。噛み砕けば、暇つぶし。

「戦闘職種ではないですし、幹部ではないので拙い方法ですが聞いていただけますか？」

陸の1曹は無言で頷く。お互いに酔いなど吹き飛んでいる。

「こちらが硫黄島の地図になります。竜がいる場所はここ。ここから通じる道はこの二つ……」

A4の地図を見せる。本来は移動訓練などで来た他部隊用に作られたものだ。

硫黄島の観光名所が色々と記載されている代物だが、位置の把握に便利なのだ。

その最新版、切り開かれた道なども全て記載されている。

つまり、竜が通る道がわかる。

「この道二つにキルゾーンを形成します。それを突破されたらこの位置に更にもう一つ。出来れば、予備隊で機動性があるのも欲しいですが」

「いい位置だな。どの道狭い島だ。これ位しか無理だろう。で、どのような部隊を配置する？」

「僕が空自なので、馴染み深い部隊が良いですね。基地防空隊が良いです。彼らなら適任ですよ」

「基地防空隊？」

基地防空隊というのは、高射とは異なりエリアディフェンスではなく、ポイントディフェンスが専門の部隊だ。

具体的に言うと、基地と周辺を防御する対空部隊ではなく、基地のみを守る部隊だ。

範囲が狭いのは理由がある。

装備がそれに特化しているのだ。その装備で一番今回で重要なのは『VADS1改』

「VADS1改が良いです。アレなら輸送機で空輸できるので一言で言うなら対空機関砲。」

アメリカ軍で開発された対空機関砲システムで、M61・20mm機関砲にレーザー、コンピュータなどを組み合わせた、半自動の対空機関砲。

個人携行の対空ミサイルよりも射程は短い、地上と空の目標が狙える。自動車で牽引して移動し、射撃するためには設置と調整にかなり時間がかかるのが難点。だが、それらを補って余りあるメリットがある。

発射速度が速いのだ。500発の20mm弾を最高で10秒ちよいで打ち切るという素敵具合。早漏にも程がある。

こいつについてるM61つてのが、まあ俗に言うバルカン。6本の銃身と薬室が一体化したものがモーターでグルグル回ることによって、反動とかその他諸々利用して装填発射してる銃や砲では有り得ないほどに高速な発射速度を発揮してるのだ。

元々、航空機に積んでたものだった。

WW2が終わり、ジェット機全盛期。高速になりすぎた航空機が航空機に銃撃する際に、今までの銃器では効果が薄くなる可能性が出た。なら、どうするか。

A案は撃つ弾の数を増やす。ただし、1丁で。

B案も撃つ弾の数を増やす。ただし、何丁も積むことで。

C案は撃つ弾は少ないが、一発の威力を上げる。米軍が選んだのは最終的にA案。

それによって、今から140年前くらいに開発された手動式の機関銃がモダナイズされて、出来たのがM61。こいつって、毎分で1万2千発の速度で撃つた記録が残ってるくらいに頭おかし。ちなみに、個人携行の機関銃で毎分1千発撃てる銃でも高速だといわれてるんだから、11倍ってのがどれくらいおかしいかは解ると思う。

それが、今回重要。対空機関砲用に発射速度が落とされているものの、相変わらず高速なので弾幕が張れる。某縦スクロールシューティングゲームのスペカとかマジ目じゃない。

で、20mmの弾丸は戦車の正面装甲に対しては効果が無いものの、側面に後面、上面ならば十分効果を発揮する。更にはセンサー等の戦車が本来の機能を発揮する部分も容易に無力化できる。ちなみに、装甲車は普通に撃破出来ます。一発で駄目ならもう一発の精神で、普通に正面装甲でも貫通しちゃうんです。いやー、対空機関砲って本当にいいものですね。

まあ、そんなわけで竜にも有効なはず。視覚、嗅覚、聴覚を司る感覚器を破壊すれば無力化できるっしょ。別に強固な竜の鱗を貫く必要はないし。無力化できれば良いし。

20mmには様々な弾があるけど、今回は曳光自爆榴弾が最適、多分。

読んで字のごとく、撃つたら弾頭の底部に着火して光を発しつつ、着弾したら炸裂し、一定距離を飛翔したら自爆して周囲の被害を減らす弾丸。

メリットは3つ。感覚器に直撃しなくともダメージを与えられる点と、炸裂により鱗を剥げる可能性があるからだ。魚の鱗をとる感じで爆圧によって捲りあがらせるのだ。そして、最も重要なのは出血性が神経性のショックが狙えるということだ。

通常、人間が銃で撃たれた場合、重要な内蔵や血管等の致命的部位に着弾しない限り即死する可能性は少ない。竜も同様なことが考えられる。

竜のサイズに対して20mmは豆鉄砲に等しい。だが、その弾が炸裂するならば？体表面に近い血管が神経を鋭利な破片が傷つける可能性が高くなる。それにより無力化できる可能性がある。

だが、『VADS1改』はあくまで前座。本命は別にある。VADSでは身動きをとれなく出来るかもしれないが、止めはさせないの

だ。

「IEDって作れます？出来れば、EFPを」

「もちろん、解除する方法を知っているということは基礎知識で製造を出来ないといけないからな」

「……いや、普通無理だから。聞いたってなんだけど、そんなの作れるのテロリスト予備軍だから。」

因みに、「IED」ってのはイラクとかアフガンで米軍が被害を受けてる即席爆発装置……仕掛け爆弾のことだ。

大砲の砲弾を何発も使用したものは家屋を簡単に倒壊させ、装甲車すらも空を舞う。

『EFP』ってのは、その対装甲バージョン。サイズや製造法にもよるが、戦車を50m離れた位置から撃破できる場合もある。これならば、竜の鱗も余裕で貫徹し、臓器まで到達する。

「爆破処分用のC-4もあるし、不発弾を湯煎して炸薬を取り出せるからなあ。まあ、何とでもなるだろ」

「……この人、マジでテロリン（テロリストではとげがあるので名称変えました）じゃん。」

素敵。今度弟子入りしよう。テロリン（意外に気に入りました）王に俺はなる！

「後は、予備隊で陸自の普通科からカールグスタフかパンツァーフアーストに慣れた部隊がいれば何とかなりそうですね。贅沢言えば、96マルチも欲しいですけど」

「上空からの偵察は、この島にいる救難隊のヘリで代用できそうだな」

「ですね。第一案はこんなところで……次のはこんなのでどうでしょう？」

次々に試案を口にし、修正を加えていく。状況を変え、装備を変え、最善を求める。細部はまだ求めない。まだ可能性の段階だ。

だが、わりと最初から気が付いたのだが、実はこれは本当に実際に行われる状況を想定していない。所詮、思考実験だ。

予想通りに、これは飲んでる最中の戯言。

その証拠に、陸の1曹と僕だけシリアスムード。

あ、そのほかの人間？

・・・・・・・・・・・・・・・・うん、駄目になってるよ？

そろそろやばいよ、修羅場になるよ。修羅BARだよ、飲んでるだけだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・やべえ、これ我ながら寒いよ。ちよっくら吊ってくる。

竜と思惑 11

人がシリアスモードに入ってるのに、横でふざけるとムカつくよね？うん。

海自司令と空自司令が石井ちゃんに絡みまくっているんだこれが。いい年こいて何やってんだ、このおっさん二人。

でもね、僕は止めようと思わない。むしろ、止めれない。

なぜなら、石井ちゃんの目の前には膨大な数のビールの空き缶が並んでいたから。

酔うと泣いたり、笑ったり、脱いだりする人がいる。石井ちゃんの場合、逆。

泣いたり笑ったり出来なくなったり、脱がしたりする。言ってる意味がわからない？

酒癖が悪いというのを百倍位したようなものだと思ってもらえばいい。

いや、僕にはご褒美ですが。だから、海自司令たちには是非とも味わってもらいたい。我らがドリームクラブへようこそ。

隣の陸自の1曹に声を掛ける。

「タバコ吸いにいきませんか？惨劇の幕が開く前に」

「……海自司令たちが絡みまくってるが止めなくていいの？」

「すぐに後悔しますよ。巻き込まれないうちに退避しましょう」

「何をいつているのかわからないが、まあ外の空気でも吸いにいくか」

「その方がようございます」

そのまま、二人で喫煙所に向かう。

遠くから、怒声と罵声、悲鳴が聞こえてきた。

「ブタのくせにバカにしゃがってよおおお！！何が司令だよ 酌しろオラアアア」

「すみませんすみません」「いきでてすみません」

「ブタのくせに人間のことはしゃべってんじゃねーぞお！鳴け！」

「ぶひい！」「ぶひい！」

「おう、いい鳴き声だ！でも」

「ひぎい」

「ブタは服なんか着ないよなあ」

石井ちゃん絶好調。

隣の1曹は青い顔をしている。

「はあ？聞こえねえ！」

「服は、服だけは」「石井様お慈悲をお慈悲を！」

「ブタがしゃべってんじゃねえ！」

「いやあああああ」

隣の1曹は白い顔をしている。

「粗末だなあ、おい。もうちょっと立派なのぶら下げとけよ」

「ぶ、ぶひい」「ぶひぶひ」

「そういや、ブタのつてドリル状らしいじゃねえか、その粗末なのドリル状にしてみるよ」

「ぶ、ぶひ」「ぶひいいいい」

「はあ？」

「無理です！」「そんなの出来ません！」

「しゃべってんじゃねーぞ！よしわかった、じゃあ待ってる、包丁でちょっとドリル状にしてやろうじゃねか、ひやはは」

隣の1曹は震えだした。

でも、まだ地獄の釜は開いたばかり。いいなあ、楽しそうだなあ。

それから30分後、静かになった。

宴会場には満足げな笑みを浮かべてソファでスヤスヤお休み中の石井ちゃんと、全裸に靴下で正座したまま気絶してるおっさん二人。股間が見苦しいのでどんぶりを置いておいた。

あ、1曹は途中で気分が悪くなったらしく帰りました。

おかげで、片付けは僕1人ですか、そうですか。

はあ、凹む。

幕間 変化

0130時 硫黄島 戦車豪

虫の音が唐突に止まる。

同時に重量物が地面をこするような音が聞こえた。

豪の中から巨体が身を現す。

竜だ。

竜が巨体を震わせ身についた土埃を振り落とす。

広場で縮めた体躯を伸ばし、月を仰ぎ見る。

その様は月を捕食せんがごとく。

畳まれた翼を全開。月に照らされた小山のようなシルエットは、複雑な曲線を描く優美なものに変わる。

一声吼えた。竜の身が燐光に包まれる。

それは一瞬の出来事だった。

燐光が収束し、人型を形作る。巨大な竜の姿は既に無い。

燐光が消える。

そこには人間と変わらぬような生き物が直立していた。

差異は二つ。人間に翼は無い。そして、尾も無い。他にもあるかもしれないが、月明かりの中ではわからない。

人間のような生き物は足を踏み出そうとして躓く。まるで、初めて歩くようなぎこちなさだ。

………かなりの時間動き回り身体が慣れたのだろう、ようやく動き回るのを止めた。

宙に手をかざす。それを数秒行った後、その生き物は歩き始めた。

その方角には………自衛隊の施設が月明かりに佇んでいた。

竜と波乱1

硫黄島の朝は早い。

朝は6時の起床ラッパから始まる。

「ここで二度寝を抜くと一日が台無しになるんですよ。だから気が抜けない作業ですね」

朝の定番が始まった。

起床、点呼、二度寝、朝食、猫いじりに加え、喫煙からモーニングコーヒーまで、その範囲はあまりにひどい。

その定番を終えるともう出勤である。

今朝は彼の姿が見えない。どうしたのだろうか。

朝礼過ぎになって現れた彼に話を聞くと「敵に襲われた」のだという。

その敵は「二日酔い」というもので、居室の寝床に押さえつけられて身動きがとれなくなっただけらしい。

幸い彼に怪我はなかったが、月に数回はこの敵が襲ってくるのだという。

この島は島民の入れ替わりが激しい。

二年間この島内生活を行っているベテランは

「俺、この島から転勤したら結婚するんだ」と語る。

この島民を続けていく際、気をつけなければならないことは体調の管理だ。

運動の苦手な老人はそれに負けてすぐに太りだしてしまう。

「たまに、健康診断の結果、再検査とか届くんですよ。

もちろん運動する気はありませんよ。真面目に働いたら負けかなと思ってますから」

「最近はや夜食など、深酒は止められるんですが、やはり自分はこれですね」

と彼は仕込みの結果の腹を見つめる。

健康診断の際に気をつけなければならないことはBMI指数だと彼はもたす。

彼の自堕落が現されるときだ。

「やっぱり一番うれしいのは朝食抜いたり腹を引っ込めたりして合格したときだね、また酒が飲めてよかつたなと」

21時〜23時までは居室で飲酒に精を出す。

「一度やめようかと思ったこともあるんです。

でもね、同僚で美味しそうに呑んでいるのを見たとき、

禁酒なんてできない！僕も部屋で一杯やるっ！

つてやっぱりこのみちにもどって来ちゃったんです。

同僚のせいです」

基本的な飲酒量は決まっているが、一緒に飲む同僚の嗜好に合わせて多種多量の飲酒をしなければいけないのが辛いところ、と彼は語る。

「でも自分が選んだ道だからね。後悔はしてないよ」

「時々ね、わざわざウコンくれる女医さんもいるんですよ。

豚野朗乙つて。ちょっと嬉しいですね」

そう恥ずかしげに語る彼はまさしく屑野朗の鏡だった。

〜完〜

「……………すみません。ちょっと、現実逃避してました、はい。」

ええとね、何というかね。ピンチなんですよ。

もう、逃れられない状態というか何というか？今そこにある危機？

恐怖の総和？まあ、そんな感じですよ。

いや、ね、朝起きたら何故か隣に「幼女」が寝てたらどうしたらいいのでしょうか。

あーはっはっは、誰かに見られたら死ぬ！社会的に死ぬ！邪神ア

ネス召還しちゃう！

しかも、この子服着てないよ！全裸だよ！マッパダカーニバルだよ！

もう積んだよ、僕の人生終わりだよ！もうゴールしていいよね！
と、とりあえず何か着せないと……。

コンコン「入るよ」ガチャ

田中2尉タイミング良いなあ。

見詰め合う二人。時が止まる。永遠はあるよ、ここにあるよ。

「等身大フィギアです」

「うん、そう。わかったよ。ペド2曹」

素敵な称号を手に入れた。

竜と波乱2

まさかの時のスペイン宗教裁判！

はい！ただ今異端審問真つ最中！

奔る鞭！燃え盛るロウソク！今ならポールギャグもつけちゃう！君は生き残れるか！もとえ、僕は生き残れるか！

………どうしてこうなった。

ただ、起きたら隣に『幼女』が寝てただけじゃん。騒ぐ必要ないじゃん。ちよつと全裸だっただけじゃん。

「で、どうしてこうなったのかな。ペド2曹」

「ふも、ふもつふふもつふ」（いや、何がなんだかさっぱり）

「んゝ聞こえないな。この変態ペド野郎」

「ふもふもふもふもふも」（変態じゃないよ、仮に変態だとしても変態という名の紳士だよ！）

あ、因みに頭から何故か布袋被されてます、僕。

布袋の通称名は罪袋とか呼ばれてるみたいです。おかげで喋れないは、周囲の状況が見えないは、呼吸が苦しいはで結構人道的にどうよって感じですね。

椅子には座らせてくれてますけど、手首足首はプラスチックカフ（簡易的な手錠）で捕縛されてるので身動きが取れません。

「まあ、冗談はこれくらいにしておいて」

布袋が緩む。少なくとも喋れる。

「どうしてこうなったかの説明して欲しいんだけど」

「いや、僕にもさっぱり」

田中2尉はわざとらしくため息をつく。

「返答次第では懲戒免職で豚箱だよ」

「いや、そう言われても、起きたらこうなっていたとしたらしか」

「ふむん」

「昨日宴会の片付け1人でやってそのまま寝たら、隣に何故かいたんですよ」

「振り向けば隣に？」

「振り向けば隣に」

「では、何も……その……していないと？」

「誓って」

「何に？」

「ディスプレイの中の嫁に。それに……」

「それに？」

「僕はロリとかペドに興味が無いので」

「……へえ。じゃあ、これはなんだろう？」

そう言つて、田中2尉はごそごそ漁つたと思うとの何かのタイトルを読み上げる。

「えーと、何々？ 『陽射しの中のジーコ』 『少女』 『はじめてのじゅうぐんぐんいさん』 とか色々あるんだけど」

……

全身から変な汗がだらだら出てきました。ええと、ほらあれです。どこにでもあるパソコン専用のゲームソフトのタイトルだけです。ただ、少し大人向けな内容なだけで。あと、全て僕が所持しているだけです。

とうじょうじんぶつぜんいん18さいいじょうだからねかんちがいしないでね！……やべ、『日差しに中のジーコ』は違うし。「これは完璧に黒だと思っただけどうだろう？ それと、後で貸してね」

「それはそれ、これはこれです！ それと、貸しません」
「ほう」

「いいですか！ 3次元なんてクソです！ 奴ら息してるんですよ！（中略）熱があるんですよ！ 奴ら感情あるんですよ！（中略）3次元怖い！ 3次元キモい！」

「ああ、じゃあこの『ラス555』とか『3カスタム少女』

と『オ リビオン』についてはどう解釈したらいいんだろうね？」

「それらは2・5次元です！！！！いいですか！僕は現実の女性に興味はありません！」

「開廷〜無罪〜閉廷〜。現実に戻ってこないでくださいね〜。まあ、最初っからわかっていたけど何もなかったっばいね〜」

「勝訴！！！」

自由だ！俺は自由を手に入れた！

「で、どう思います〜石井3尉」

「死ぬがよい」

！？

石井ちゃん……いたの？

うん、死んだ。

竜と波乱3

「やかましい！人が寝ておるんだから静かにせぬか！」
む？誰の声だ、これ？

「ほう、朝早くから随分と倒錯的なことをしておるのう。人の趣味にけちをつけるつもりは無いが、もう少し静かにしてくれんかの？
じゃあの、寝るから起こすでない」

不機嫌そうな声がゴソゴソという物音と共に聞こえた。この位置はベッドか。

脳内のピースが埋まった。この口調はあれだな、うん。

「寝てんじゃねえ！竜！せめて誤解を解いてから寝やがれ！お願いします！お慈悲を！」

後半弱気なのは気にしちや駄目だぜ！？

「ほう、人に化身しているのに気が付いたか。やるな、人間。いつから気が付いたのかの？」

「教えるから、頭の袋と手枷足枷解いてくれると助かる」

「ほう、我を小間使いとはのう。よかる、外してやる」

因みになのだが、今手足にはめられているプラスチックカフは華奢な形のわりに意外に切断しにくい。ナイフで刃が立たない。カッティングプライヤーで切るのがお勧めだ。

だが、そんなプラスチックカフは一瞬で切断された。恐らく素手で。

ようやく自由になった手で袋を筆り取る。

ベッドにペタペタ歩いていく幼女が見えた。地面にまで届くような銀髪に目がいく。

ベッドを椅子代わりに腰掛けた幼女がこちらを向く。

整った顔、病的なまでに白い肌、金色の目が人間離れた雰囲気醸し出す。

「改めましておはよう、竜さん」

「うむ、おはよう」

それはともかく・・・服着てもらえませんかね。
僕のマイサンが自己主張しそうなんです。

（呼んだ？）

（呼んでねえ！）

しようがないので、毛布でグルグル巻きにする。

春巻きの完成だ。

「恥ずかしがることあるまいに、初心じゃの」

「紳士なので」

ただし、変態という名の紳士ですが！

「それではの、いつから気が付いた？」

「割と最初から」

「ほう、後学のために何故気が付いたか教えてはもらえんかの」

「何故つてそりゃあ・・・口調に決まっている」

「口調？」

心底わからないようだ。

「そんな口調してるのがいたらババアに決まってるだろうが。外見

幼女だからロリババアだ」

「くくく、ババアとは良い度胸だの。人間、命が惜しくないのかの

う？」

「勘違いするなよ、ババアというのは俺等の業界では親愛と好意の意味を込めて言われることもある。例えていうなら、BK・・・ババア結婚してくれ、とかな」

結婚の辺りで竜の様子がおかしくなった。瞬きの回数が増え、こちらに視線を送っていたのが周囲にチラチラ向かうようになった。

何意識してんの、この竜。

「結婚・・・随分と性急な・・・」

「いや、それ例え話だから」

「人間！！」

抗議の声をあげる竜。うむ、馬鹿可愛い。

「ついでながら言うが、竜・・・お前の外見なら結婚するのは不可能だ」

「・・・・・・・・・・はっ！笑わせるなよ、人間！この見目麗しく若々しい肢体の何処に不満がある！」

僕は首を無言で横に振った。

「若すぎるんだよ」

「は？」

「若すぎるんだよ！ロリババア！加減を考えろ！馬鹿！その外見だと、エロ展開したら問題出るだろうが！邪神アグネスちゃんとか召還しちゃうだろうが！最近は『このさくひんのとっじょじんぶつは18さいいじょうなんだからね！かんちがいしないでね！』とか効かないんだぞ！（中略）あ、でも外見はともかく実際の年齢は多分18歳以上だから合法か？合法ロリ！合法ロリです！僕は感動を抑えることが出来ない！（中略）あ、でも人間じゃないしこの際はどうかだろう。でも、逆に人外って事で脱法か？脱法ロリ！新ジャンル！（中略）勝訴！勝訴です！」

剣幕に押されてか竜は泣いていた。

ち、メンタルが弱いやつめ。

竜と波乱4

えぐえぐ泣いてる幼女（笑）を目の前にして、思ったことはただ一つ。

罪悪感？

ノン！

後悔？

ノン！

焦り？

ノン！

それらでなく、思ったのはただ一つ。

世間体が悪いので泣きやませたい。考えても見て欲しい、全裸だったので応急的に毛布でぐるぐる巻き・・・春巻き状態にした外見幼女が泣いているという光景は限りなくアレなのです。

・・・・・・・・・・どう見ても犯罪です。ありがとうございました。

しょうがないので、非常食用の棚をゴソゴソ漁る。

見つけたのはチョコレート風味の某クッキー風保存食。釣りや散歩、唐辛子採取のお供に最適な一品。常に常備している。

で、それを朝食代わりにモソモソ食いつつ、あからさまに「びやあゝあゝあうまひいゝいゝ」「美味い！美味すぎる！」等、演技を行う。うん、あからさまにも程がある。

でもまあ、それに引っかかる幼女（笑）も中々アレですよ？具体

的に言っていると馬鹿です。
餌に釣られてるあたりちよろいですなあ、実に。一発で泣き止んだので目の前でちよつと振ってみると……。

食いつかれた。指ごといかれそうだったので、内心びびったのは内緒だよ！

で、まあ感想は一言。

「ウマクナイ……」

いやまあ、確かに美味いってほどじゃないんだよね、これ。でもね、貧乏性な僕には十分ご馳走に感じられちゃうんだよ！米軍のレーションの不人気メニューでも美味しく感じられる味覚舐めんなよ！でもアレ、タバスコ欲しくなるんだよなあ。

でもまあ、あからさまにマズイと言われるのは癪に障るので、次のネタを用意する。

ついでに春巻き状態では食べるにくそうなので、制服のワイシャツを着せる。

身体のサイズに不釣合いなのでコートのような感じになったが……。

……おいおい、これってやばいんじゃないの？犯罪レベル上がったんじゃないの？

これはあれか。男の夢の一つ、裸ワイシャツということが。

無意識に選んだマイ服装センスに思わず絶望。マイ息子も思わず反応。

（呼んだ？）

（呼んでねえ！）

（そう言わずにスタンドアップしてもいいでしょ？）

（出番じゃねえ！座ってる！）

チラチラと覗く足の白さが実に眩しい。思わず「目がー目がー」と目を押さえつつ叫びたくなる。

このままでは本当にロリコン街道まっしぐらだよ！オムスビコロリンのごとく坂を一直線だよ！コロリンとロリコンはアナグラムだよ！

（静まれ、静まるんだ、俺の股間）

（俺を解き放て、楽になれ）

（お前を解き放つわけにはいかない！世界を危機に陥れるわけにはいかないんだ！）

（今回は引いてやる。だが忘れるな……。俺はお前で、お前は俺だ。いつ何時も隙をうかがっているぞ……）

まあ、そんな感じで股間と中二病的会話をしつつ、次のメニューを幼女（笑）にさしだした。

「ふははは、そやつは保存食の中でも一番の小物よ。次の奴は一味違うぞ！出ですよ！ビーフジャーキー！喉が渴くかもしれないので、ジューズもどうぞ」

「むう、噛めば噛むほど肉の味が出てくるのう。塩味しかなかった干し肉とは違うのう。だが、そんなものなのかの？ついでに、この飲み物もつと寄越せ」

「ふふふ、恐れおののくが良い！こいつは鍋の隠し味に使うと最高だ！出ですよ！サバの水煮！今回はそのまま暖めないで食べてもらうので本来の力はこんなもんじゃないぞ！切り口で怪我しないでくださいね。スプーンとフォークでどうぞ」

「む、何故鉄の入れ物の中から食べ物が……。ほう、生臭いがこれは良いな。後味が悪くなければ最高だ。だが、これで満足は出来んの」

「くくく、ようやく湯が沸いた！今までののは全て時間稼ぎに過ぎぬ！これからが本番よ！出でよ！カップ麺！熱いので気をつけてね。あと、ちよつと待ってください……あ、どうぞ」

「これはまた面妖な素材な器……。む？うま、いや、美味いと思っではないぞ！本当だぞ！何？他の味もあるし、付けあわせや調味料を変えると更に化ける？ふむん、人間も進化したな。え？スープは全部飲むな？健康に悪い？そこまで竜の身体は脆弱に見られるか！随分と舐められたものだのう。む、本当に飲んでは駄目？だか飲む！人間ごときが止められると思うなよ！」

「これがとどめだ！今回は本気と書いてマジと読む！甘き煉獄に凍れ！こやつの名はアイスクリーム！一息に食べると頭痛が起こるので、ゆっくり食べてください」

「！？これは！この冷たさと甘さは何度も味わった！だが、このバランスとまるやかさは！そもそも、乳を低温で凝結してもこうはならん！どうやって行った！いや、愚問かのう。美味ければそれが正義じゃ。ところで、頭が痛いのだが何とかならんかのう？なに？一気に食べすぎ？阿呆、こんな美味しい物をちまちま食べれるか！一口だ！一口！すまぬ、謝る。やはり頭が痛い」

そんなこんなで、幼女（笑）の機嫌をとることに成功した！ついでに賞味期限切れ在庫がほぼ一掃出来た。素晴らしい。いやー、結構あるもんだなあ。唯一賞味期限が切れていないアイスも、食堂で出たデザートを持ってきただけなので元手ゼロ。素晴らしい。

まあ、そんな事を思っていると携帯電話のアラームがなった。むう、いつの間にか出勤時間。出勤するのは良いけど、その間この幼女（笑）をどうするかなあ。流石に職場に連れて行くわけには行かない

し
・
・
・
。

竜と波乱5

「スイッチオン！ポチツとな！」
テレビをつける。

「おお！箱の中に人が！」
テンプレの反応ありがとう。

テレビの説明を簡単にすませる。
ついでに、「スイッチオン！ポチツとな！」と唱えながらスイッチ
を押すように言っていると信じた。

ただし、今回見てもらうのはテレビ番組じゃない。
この島が舞台になった映画2つ。
実際に一部ロケも行ったと聞いた。

その映画の名は「硫黄島の星条旗」と「硫黄島からの手紙」。
どうでもいいけど、この島の売店に売ってるお土産品のクッキーの
名称が「硫黄島からの便り」なのは狙いすぎだと思つ。
ついでに、同じく売店で売っている『硫黄人』と描かれたTシャツ
も、『海人』のパクリである。

ああ、いけない。
つい脱線してしまった。

この島が舞台になった映画を見せるのには、もちろん理由がある。
それは、この島が大東亜戦争中に激戦地になったのに他ならない。
この島は島自体が自衛隊の基地であると同時に、墓標。
色々の特異な島なのだ。

未だに不発弾が見つかる。

未だに数多の英霊の遺骨の多くが発見できていない。

未だに多くの地下壕、朽ち果てた兵器群、施設跡が残っている。

民間人は建設業者、電話会社の社員、食堂の調理師以外にこの島に民間人はいない。

火山島なので、危険地帯が多い。

火山島なので、毎年徐々に地形が変化している。

基本的に島全体がジャングルなのだが、火山島なので一部地熱のおかげで不毛の大地になっている。

火山島なので地下壕は基本的に天然のサウナ。

サウナ豪と呼ばれるサウナ目的に整備された地下壕も存在する。

サソリやファイヤーアント、寄生虫持ちのカタツムリ等、危険生物がいる。

エトセトラ……。

色々の特異事項が多く、特別なルールが多い。

そのなかでも、僕が真っ先に覚えておいてほしいと思うのは、数多くの人がそれぞれの思いを抱えたまま散っていったこと、生き地獄を味わったこと、未だに悔やみ悩んでいる人がいること。

遺骨収集を手伝ったことがある。

ジャングルの中、地下壕の中、様々な場所を探した。

暗く、暑く、湿気がこもる地下壕の中はじつとじているだけで辛い。

その様な状況で、限界を感じて休憩をとる人が多い中、黙々と作業する人がいる。

かつての戦友を、家族を懸命に探す人たちだ。

それを見る以前も、見て以降もこの島で散っていった数多の魂への敬意、畏敬を忘れたことが無い。

だから、竜にも少しはこの片鱗でも良いから感じて欲しかった。

映画なら、物語なら、最後まで見てもらえらるうつ。
御霊に対して、失礼な真似をして欲しくなかった。
それは僕のちっぽけな自己満足。

だから、見て欲しい。

この『硫黄島からの手紙』を。

DVDプレーヤー代わりに使っているゲーム機にDVDをパッケージから取り出し再生する。

さて、出勤しようと思いを浮かした瞬間、ふと手元を見る。

.....

はて？

何故、手元のパッケージの中に、入れたはずの『硫黄島からの手紙』が？

これは一枚しかないのだけど.....

では、今ゲーム機に入っているのは.....何だろう？

その直後に艶やかな嬌声がテレビから流れ始めた。

.....ヤッチマッタ。

コレ、アダルトナビデオデス。

竜と波乱6

テレビから軽快な音楽と共に「オー、イエース！オー、イエース！」「ファックミー！ファックミー！」等、聞こえる中、僕は懸命に戦っていた。

敵は目の前にいるアルティメットエロティッククリーチャー。

身体は幼女、頭脳はババアの恐るべき生命体、気を抜けば一瞬でやられる。

目は爛々と輝き、頬を上気させ、手はワキワキと不気味に蠢かせ、部屋の隅に追い詰めてくる。

「朝からこんなものを見せるとは見下げた屑じゃの。我を襲うつもりかのう？」

そう言うなり、着ていたワイシャツをいそいそ脱ぎ始める幼女（笑）。

痴女だー！痴女が出たぞー！むしろ、痴幼女か？

あと、手招きすんな、良い笑顔すんな。

「いえ、めっそもございませぬ。これはじこです、はい」

僕、もう出勤したい。

「そうは言っても体はしようじ・・・ふむ、ほう、不能かの？」

空気を読んで今回は、反応していないようだ。

偉いぞ、我が息子！

（いいってことよ！ファージャー！）

（愛しの我が息子よ！今まで蔑ろにしてすまなかった！）

（安心するのは早いぜ、ファージャー。敵はまだ去っていない）

（わかった。気をつける。お前も挑発に乗るなよ）

（頭に血が上りやすいのは親父譲りだからな。肝に銘じておくよ。

グッドラック！）

息子にも励まされるとはやきがまわったな。

でも、負けるわけにはいかない。

これは、命が掛かった戦いなのだ。
もっと具体的に言うなら、社会的地位。

それを守るために言葉をつむぐ！

「いや、もう、それでいいです。僕が悪かったです。生きていてすみません。光合成とかして生きていきます」

社会的地位駄々下がりである。

「まあ、よかる。まだ日が昇ったばかりだし。日が落ちてからを楽しむにしておる」

……僕、もうこの部屋に帰ってきたくありません。

それからDVDを『硫黄島からの手紙』に換えた後、部屋から出てきた。

着替えをしてる際に押し倒されたが、さめざめ泣いたら許してくれた。

……ああ、うん、エロゲのヒロインの大変さが良くわかった。

わかりたくなかったけど。

ところで、石井3尉達いつの間にかこの部屋からいなくなったんだろっ？

正直どうでも良いけど、ほんの少し気になる。

まあ、いいや。

出勤しないと。

職場に着いたのは朝礼直前。

だけど、様子がおかしい。

通常、朝礼は自衛隊体操後にランニングがあるので、体育服装に着替えているものだけど、誰も着替えていない。

全員、テレビの前に集まっている。

そのテレビには、ヘリから空撮したと思える森林が映っていた。ニュースのようだけど、何故こんな何でもないような森林を映すの？それに全員注目しているのは何故？

．．．．．胸騒ぎがする。

ここまで全員がニュースに注目しているのは過去に一回しか見たことが無い。

911だ。

米国で起こった同時多発テロの際は、ほぼ全チャンネルがその緊急報道。

その日、一日全く仕事が出来なかった。

今の、テレビを見ている人間からは、それに近いものが感じられた。

アナウンサーが何かを話している。

「昨日午前9時頃、Y県にある陸上自衛隊の屋内射撃場が消失しました。」

現在判明している行方不明者は航空自衛隊所属の隊員が一名いるということです。

なお、原因は現在でも不明です。

現場は一面森林になっており、植生は日本では見られない物だとの専門家からのコメントが寄せられています。

あ、ただ今防衛省からのコメントが来ました。

行方不明者の身元が判明しました。

航空自衛隊、芦屋基地所属、3等空曹．．．」

行方不明者の名前を聞いた瞬間、目の前が真っ暗になった。

あいつは同期。

教育課程の合計8ヶ月程の付き合いしかないけど、その濃密な期間の絆は学生生活等では比べ物にならないほどに人生の中で大切な物の一つ。

あいつとは気が合った。

機会があるたびに呑んでいる。
親友の1人だといつても良い。
それがいなくなった……。
胸のどこかに何かが無くなった様な損失感。
悪い夢のようだ。
いや、現実なのはわかっている。

何人も同期が自衛隊を辞めていき、別の道を歩んでいったのは何
度も経験がある。
自衛隊を辞めたので、徐々に疎遠になり連絡がつかなくなったり、
所在不明になったのも何人かいた。
それでも、唐突に同期がいなくなったのは初めてだ。
特に、今回はその中で最も親しかった友人。
無事を願うばかりだ……。

時計を見たが、朝礼がいつまで経っても始まらない。
そろそろ、ニュースを見ても焦燥感が募るばかりだ。
記事が切り替わった。
芸能ニュースだ。
どうでも良い。
誰かがチャンネルを切り替える。
同じく消失事件、内容は全く同じ。
次のチャンネルも。
次のチャンネルも！
次のチャンネルも！！

課業開始のラッパが鳴る。
それが鳴っても誰も動かない。
また、チャンネルが変わる。
内容は変化無し。

アナウンサーは同じことしか喋らない。
コメンテーターは当たり障りのないことを語る。

クソッ！

何がどうなっている。

誰でも良い、どんな些細なことでも良い、教えて欲しい。

いや、原因とかはどうでも良い。

ただ、あいつが生きているか、それだけで良い。

焦燥感を募らせている中、ふと思いついた。

射撃場が消失した時間と、そいつが現れた時間を勘案する。

・・・・・・・・・・・・・・・・有り得るかもしれない。

通常の生物なら無理な移動速度だ。

Y県から、この島には広大な距離がある。

時間も限られる。

それをどうやって移動するのか？

だが、あの生物なら可能かもしれない。

その生物の名は竜。

神話の存在で、今は僕の部屋にいる。

竜と波乱7

テレビに嘯り付いている小隊長に、営内の部屋に忘れ物をしたので取りに行くと言った。

生返事だったが許可をもらったので、駆け足で部屋に向かう。

ドアを開ける前に深呼吸を何度かする。

全力で走ってきたのもあるが、心を落ち着ける必要があった。

今のままでは、理解できない衝動に押され、論理的に話せない気がした。

深呼吸をしつつ、目を瞑る。

もう、大丈夫だ。

僕は落ち着いてる。

ドアのノブをしっかりと握り、ドアを開けた。

航空機の兵装や、搭載量の^{ペイロード}デモンストレーションの一環で、砲弾や爆弾、ミサイルにロケット弾等が航空機の前にズラリと並べられた光景を見たこと何度かある。

それに類似する光景が、部屋に入った瞬間に目の前に広がっていた。

問題は、それが僕の持っている癒しグッズだったこと。

その内容は、エロ漫画に同人誌、エロゲーに18禁OVA等、硫黄島の不毛な生活に少しばかりの彩を添えてくれる神器達。

オナホールが見つかってなくて本当に良かった。

この光景は、中学時代に河川敷で『野生のエロ漫画』をキャプチャーした次の日、入念に隠したつもりが起きたら机の上に積み上げられていた以来。

『大人になったのね（ハート）』と、書かれたマイマザー直筆の手紙がマジでトラウマである。

それを読んだ直後、隠れていた両親や姉からクラッカーと紙テープで、お祝いされた瞬間は本気で死のうと思った。あと、赤飯炊くのは色々と思う。

だが、あの時とは違う！

もうアレから15年は経ち、僕は成長した！

どのくらい成長したかというと、本屋で女性店員でもコミックLを買える位！

逆に興奮するね！

あ、アレ意外に表紙はマトモって意見は無視。

レジ出すときはバーコード読み取りやすいように、背表紙で出すし、別に恥ずかしいわけじゃないんだからね！

勘違いしないでね！？

えーと、つまりはまあ、あれです。

僕は強くなった。

これくらいのアクシデントは軽く流せるくらいに。

イエス！ウィーキャン！

熱心に薄い本『同人誌』を読んでいた竜が、こちらに気がついた。その竜に対し、慈愛に満ちた笑みで話しかける。

「それら象形画はあくまで人間の欲望を抽象的に表現した物なので、現実とは異なります。それらはあくまで芸術なのです。良く見てください。人間の等身や眼球の大きさを考えれば明らかに異なりますね。（中略）これらは日本独自の文化で（中略）海外でも新 エル等の芸術家が（中略）まさに、これは現代のルネサンスと呼ばれるものなのです。お分かりいただけますか？」

竜は凄く感心したようだ。

「ほう、ではこの表現はどのような意味があるのかのう？」

「ああ、これですか。これは台詞をわざと崩すことにより、理性が失われていることを現しています。みくら語と呼ばれています」

「ふむ、この『ひぎい』や『らめえ』という台詞も興味深いのう。是非とも普段から使ってみたいの」

「それらは、然るべき時のみに使うべき言葉。高等な言語なので、興味本位で使うべきではありません」

「おお、言葉は意味と同時に力を伴う。それなのじゃな？」

「その通りでございます。言霊と呼ばれます」

「ふふ、大分理解できたぞ。次はこの表現じゃ」

(中略)

僕は何をしているのだろう。

誰かこの惨劇を止めてください。

それだけが僕の望みです。

竜と波乱7（後書き）

呑んだ勢いで書いた。
後悔しかない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8147n/>

ソルジャーミーツドラゴン

2011年2月16日05時56分発行